
ゲーマーズフロント

武上 洵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲームーズフロント

【Nコード】

N8003N

【作者名】

武上 溪

【あらすじ】

高校時代の同級生がオープンしたゲームセンター：ゲームーズフロントを舞台に、47オガンダムマニアのおっさんが、ゲームーを悪用する宇宙人と死闘を繰り広げる！新感覚ゲームアクション！君は生き残れるか？

―前書き

献辞

ガンダムに関わるすべての人々に

二次創作の作者さんに

本作を捧げる

―ゲームーズフロント

―前書き

本作は、二次創作です。また、それ程深刻に主題を追っている物では有りません。途中から宇宙人が登場すると言えば、どっついう読み

物が理解頂けると思いますが。ガンダムの設定がいくつか出てきますが、もし間違いがあればご指摘下さい。どんどん訂正して行きたいと思えます。

ゲームーズフロントは、こういうゲーセンが有ったらなと云う夢を書いてみました。また、ブリティス大佐はこんな事になったら…と云う悪夢です。まとめて言うなら、ガンダム好きの夢物語です。よって、ガンダム用語の説明は有りません。知りたい方は、ガンダム関係図書を参照して下さい。

JR東海道本線区間快速の車中に移動します…。

2010年9月12日

武上溪

次話！

―第1話オールドタイプ

―第1話オールドタイプ

―第1話オールドタイプ

名古屋発大垣行き区間快速は、土曜日の夕日に染まっていた。座席は埋まっているものの、立っているのは10人程度だ。この時間に名古屋ではなく岐阜に向かう車内は、微妙に週末の賑やかさは感じられない。

何か手持ち無沙汰な気分揺れている。

車窓に木曾川が流れ込んできた時、ドアにもたれていた土畑つちはたの耳に聞き慣れた単語が引つ掛かってきた。

―シャーってさ、いっぱい名前あるんだよね―

柔らかいが女子高生のイントネーションではない。20歳前後の0しだるうか？。理由もなく女子大生じゃないなと思った。

―なんで？―

―父親が暗殺されて、本名を名乗れないのよ―

―えゝなんで暗殺されたの？―

―わかんないけど、イロイロあつたんじゃない？―

―大人の事情？―

―瞬沈黙の後、明るい笑い声が上がった。

―事情って言えばさ…

話は会社の噂話に移った。土畑は興味をなくしたが、30年前の口ポットアニメの話をする女の子がいる事に驚いた。

「シャーか。最初の方で戦死するはずが、30年たっても大人気と

は…世の中つてのは恐ろしい。」

機動戦士ガンダム。土畑が高校生の時に放映されたロボットアニメ。プラモデルは、街中の玩具店やプラモデル屋で入荷待ちになり、入ったと言う噂を聞きつけて、自転車を走らせた。この異常振りに、サブリミナルでプラモデルの画像が入れ込まれていると噂が飛んだ。子供だましのロボットアニメとして土畑もしばらくは忘れ去った。しかし、原作者は「大人になれば解る」と云う眠り爆弾を仕掛けていた。環境問題、テクノロジー社会、コミュニケーションの出来ない人々が引き起こす親子友人恋愛関係、戦争。そして、原作者と制作側のせめぎ合い。それらが、大人になった時に炸裂し始めた。まだ眠っている爆弾が有るかもしれない。続編サブストーリーと云うかたちで、いまだにストーリーは書籍とアニメで解釈を異にして作り続けられている。新たな眠り爆弾が仕掛けられているかもしれない。

区間快速は岐阜駅5番ホームにすべりこみ、土畑をホームに吐き出した。ガンダムの話をしていた女の子をチラリと振り返ってみた。47歳独身の土畑にとって、子供でもおかしくない彼女達は触れるべきではない存在だった。しかし、ガンダムを介せば間違いなく話が出来る事を皮肉に感じながら、下りのエスカレーターに体を向けた。

改札をトイカでピツと抜けた所で、エビスの左ポケットがバイブした。

土畑はポケットから携帯を抜いて開いた。

「はい。土畑です」

「ナカジマだけど、今どこ？」

「岐阜駅。JR。」

「これからさうこつち来れない？。鏡島大橋の南にゲーセン開店したんだけど…。」

「ゲーセン？。相変わらずスゴイなおまえ。ペットレストラン始めたばかりじゃなかったっけ？」

「レストランは2年前からだよ。もう、10号店までいってる。とにかく、来いよ。鏡島大橋下りたらゲーマーズフロントって看板が見えるから」

「バスで来てるんだよ。鏡島なんて面倒くさいよ」

「じゃあさ。名鉄のところに、送迎バスの看板があるから」

「わかった。ゲーマー何だっけ？」

「ゲーマーズフロント」

「了解。じゃ…」

ゲーマーの最前線か…。土畑は携帯をエビスに押し込んだ。

電話の相手は、高校の同級生中島勝義^{なかしまかつよし}。土畑は高卒で就職したが、中島は大学に進んだあとバイト先のネットカフェ店長を皮切りに、経営者になった。ネットカフェが全国展開したあと、ドックランと動物病院がついた24時間ペットレストランを始めた。最もいいかげんな奴は、最も成功しスゴイ奴になった。

中島はゲーム攻略が感心する程へたで、高校時代からゲームで行き詰まると土畑に電話をかけてくる。抜きん出たゲーマーでもないが、攻略出来ないゲームはない土畑は、それはこうであつたと答えている内にゲームは土畑だと云う事になっていた。

そんな関係の中島がゲーセンを経営すると云う。だが、中島がやるからには普通では有り得ない。

JR岐阜駅から北に向かつて歩くと、名鉄の駅が有る。その駅ビルの前で、モニター画面付きの看板が土畑を待っていた。

ゲームーズフロント行き輸送車乗り込み口

なんだか：漢字の使い方が変だ。送迎バス停留所とか乗り場だろう。中島独特のセンスには違いない。

画像は、ゲームセンターにある筐体きやうたいが映し出されている。モニターとそれを入れている箱の事だ。ドーム型の物がズラリと並んでいる。

「360度全天周囲モニター筐体を使った、ゲームーズフロントオリジナルゲーム100種が君の到着を待っている!。」

「こんなゲーセン大丈夫かよ…!」

嫌な気分襲われた土畑の前に、宇宙船風のマイクロバスがゆっくりと停車した。

次話!

「第2話RX-77-2コックピット

―第2話RX-77-2コックピット

―第2話RX-77-2コックピット

よく見るマイクロバスにペイントされているだけだが、シートは戦闘機風な物に換えられているようだ。天井は意味不明の配管が走り、窓は宇宙船風のペイントに彩られていた。所々にハンドルコックが有り、蒸気が出たら時計回りに回して下さいと書いて有る。座席には誰も乗っていない。

自動ドアのステップに乗った所であきれている土畑に、車内アナウンスが言った。

―土畑さん？乗って下さい。出ます―

あわてて土畑は運転席に近いシートに入った。

「僕を知ってるんですか？」

「社長から指示が有りまして…土畑さんと云うベージュのジオンを、名鉄前で拾うようにと」

土畑はジオンのマークを刺繍したキャップを被っている。

「誰も乗ってないけど？」

「ドームの数だけ運ぶと、そこで打ち切りです。一番の便で今日は満員になりました」

「何人で満員なんです」

「ワンフロア―20基ですから、掛10階で200です」

「10階建てって事か？」

「はい。並びで2棟建ちますけどね。今年中に…」

「なるほど…」

そりゃあゲーセンじゃないだろう。危ない訓練施設だ。土畑は戦闘機風シートに沈んだ。

「土畑さんは、かなりのゲーマーだって聞きましたけど？」

「中島はオーバーなんだよ。かなりのゲーマーってのは、オンラインゲームワールドランキングで、20位以内に入ってる化け物の事だよ。僕はオンラインゲームはやらないんだ」

「でもリメイク クライムズで初登頂したんでしょ？」

「単独登頂のテストプレイで、誰も上がれないんで頼まれたんだ。

半年も掛かった。ネットでスタートしたら、3日で落ちたよ」

「早さだけじゃないと思いますけど？」

「ゲーマーなんてモノは現実には存在しないよ。ゲームマニアの頭の中にしかね」

運転手は笑いながら言った。

「そんな事を言い出したら、現実に存在しない物なんて数え切れない程あるんじゃないんですか？世の中に…」

宇宙船風マイクロバスの前に、10階建てのビルが見えてきた。屋上に、有棘鉄線の中に落ち込んでいる巨大なプレートが有る。プレートには

ゲーマーズフロント

と型紙にスプレーで吹き付けた風の文字で書かれている。

「あの、いかにもって感じが良いでしょ？」

運転手はご機嫌に笑っている。

「悪夢までギリギリだな。いい所で止めてある。中島にしては上出来だ」

やがて、ゲート前でマイクロバスは停車した。自動でゲートが開くとスロープが上がって止まった。

「ブリッジが伸びるまでお待ち下さい」

ジャバラがビルから伸びてきた。乗降口に接続すると運転手はドアを開いた。

「スタッフカウンターで案内しますので、これを真つすぐ行って下さい」

土畑はバスを降りて、ゲーマーズフロントに入った。

スタッフカウンターまでは、広い廊下になっていて、ペガサス級強襲揚陸艦風になっている。

カウンターでは、アナハイムエレクトロニクスの制服にキャップを被った女の子が迎えてくれた。 「ゲーマーズフロントによろこそ！土畑様でいらっしやいますか？」

デイズニールランドのキャストに負けない笑顔だ。

「そうです。中島社長に呼ばれたんですが？」

「はい！こちらに。ご案内します」

土畑はカウンター横のスタッフオンリードアから従業員エレベーターに案内された。

「11階でお願いします」

土畑は女の子に見送られて11階に到着した。

エレベーターのドアが開いた。

作業台がドーム型匡体を円形に囲んでいる。書籍に埋まった何台ものノートパソコンから、ケーブルが匡体に伸びていた。その作業台の周りには工作機械があり、そばには作りかけの骨組みが置いてある。無いのは人影だ。

「中島あゝ。いるかあゝ」

真ん中のドーム型匡体からバシユツと音がして、入り口がスライドした。中からズングリムツクリのオッサンが出てきた。グレーの作

業着なのだが赤いネクタイをしている。靴はジャッキーイクスモデルのドライバーシューズ。何十年も前に生産中止になっているが、まとめ買いした在庫を中島は持っている。

オークレーのゴーグル型メガネの奥に、つばらな瞳が並んでいる。

電話やメールのやり取りはしているが、会うのは1年振りだ。

「土畑来た！。頼むよ。手ごわくて」

「話のおもムキがわからん」

「まあ見てくれよ」中島はドームの中のシートを指差した。衝撃緩衝器だと思われる物の上に、座席がある。両脇にレバーがあり、マタで挟む位置にコンソールパネル…。その下にフットペダル。

「RXシリーズの…77-2タイプのようなコックピットみたいだけど？」

「77-2はガンキャノンだろ？。MS-14のコックピットだよ」

「MSの14じゃないな…。MS-14ゲルググはジオニックス社のモビルスーツだぜ。これはアナハイムエレクトロニクスのコックピットだよ」

中島はアゴをあげて、へーと口を半開きにした。

「違うのか…。じゃあ作り直しだな」

そう云う中島の横から土畑はドーム内をのぞき込んだ。

「でも良く出来てる。ガンキャノンのゲームなら間違いなくノれる。カイ シデンファンなら部屋に置く奴がいるよ。座ってみても良いか？」

土畑は座ってみた。ハッチが閉まれば、全周囲モニターで、ガンダムワールド全開だ。

「ゲルググ高機動型で、ホワイトベースクルーのペガサス級に取り付いて、制圧するゲームなんだけどさ…」

「コンセプト自体が問題だけど？」

「営業匡体にはしないよ。創通もサンライズもホワイトベースが負けるゲームは許可しないくらいわかってるさ。でも、ニュータイプ要塞のホワイトベースを沈めるのは、ゲーマーとしてはソソラレル

「だろ？」

「そんな風に思えるようになったら、心理療法士に会いに行くか、電気が来ない場所で手塚治虫のブツダを読む事を、友達として勧めるよ。きつと治癒する」

中島は首を振って笑った。

「両方試したけど、この有り様さ」

土畑も笑った。

「で？。デバツクで問題か？」

「そう。アムロのRX-77のおかげでホワイトベースに近付けない。どうやってプログラムしてあるんだか…こっちの思考を読まれるとしか思えない」

ゲームは実際にプレーして不具合を見つけなければならぬ。クリアできるかどうかも重要だ。筐体でプレイする場合は、家庭用コントローラーのように操作出来ない可能性も有る。テストプレイで誰もクリア出来ないを作り直した。

「誰のプログラム？」

「能登島秀彦さ。タダで作ってくれた。ホワイトベースを沈めると言ったら、そいつはフェアだったさ。創通サンライズはフェアじゃないんだと」

土畑は黙った。能登島が作ったのなら、ホワイトベースクルーは原作に忠実に再現されているはずだ。ホワイトベースは無敵ではない。最終回アバオアクーで沈んでいる。アムロのRX-77も相討ちの形になっている。

「MSN-02じゃないと…MS-14じゃ厳しいかもな」

「ジオング？。サイコミュなんて男がすたるよ」

「中島の趣味なんだから異議はないけど。テストプレイしてみよう。ゲルググ高機動型で」

「よし！頼むよ。最初に、チュートリアルから行こう。スタンバイするから、お待ちを…」

中島は、作業台のパソコンに歩いて行った。

―次話！

―第3話モビルスーツ適性試験

―第3話モバイルスーツ操縦適性試験

―第3話モバイルスーツ操縦適性試験

匡体の横に鉄板が立てかけてある。入口より少し小さい。

「なんだこの鉄板？」

「チョバムプレートだ。NATOの知り合いがお土産でくれた」

「NATO軍の最高軍事機密をか？」

「まあ偽物だろ。その手のジョークが好きな奴だから…」

土畑は、鉄板を眺めた後ドーム型匡体の中に入った。

バシユツと前面のハッチが閉まった。

マタの間のコンソールパネルが点灯して、画面にオートスタートの文字が出る。スタートメニューリストが出て、1つづつ完了が出る。まず、全周囲モニターが出た。映ったのは、中島の居る11階のフロアだった。ダイレクトな画像ではない。CG画像に処理されている。閃光のハサウェイと云う小説の中の設定と同じだ。処理のタイムラグはどうすんだよって話は触れられてない。ゲームなら問題ない。

「中島がチュートリアルをやるのか？」

「いやいや。こいつはリアルタイム画像だけど、ここからゲーム画像を混ぜ込んでく。驚くぜ！」

CG処理された中島が、とって置きの笑顔を作った。

ヒューン…とモーターが唸る音がする。上を見上げると、天井がゆ

つくりと開いてゆく。CG画像だと思ってもゲームの導入としては100点満点だ。

オートパイロットの文字が出る。

天井が開き切ると、そこにザンジバル級が浮かんでいた。グンツ。

座席が揺れて、全周囲モニターは上昇して行く。ゲルググが立ち上がったのだ。下を見ると、満面の笑みの中島が小さくなり、風で髪が揺れ紙が舞い散っている。

「ここまでやんなくても…」

「どうだ〜土畑？。最高ですか〜？」

「気絶しそうだ。」

「土畑〜前方オールグリーンですー」

誘導ビーコンロックに完了が点灯した。

手を振る中島がビュンと小さくなって、ゲーマーズフロントの屋上も小さくなった。逆にザンジバル級がみるみる大きくなる。下は長良川を挟んで広がる岐阜の街だ。

オートパイロットは最短距離で着艦デッキまでブーストジャンプして着艦した。

マタの間のモニターに画像が出た。マントが有るので佐官だ。ジオンの士官は教官だオーラ全開だ。

「よく来た志願兵01番！。これよりMS-14高機動型の操縦を説明する。説明後に操縦を行ってもらおう。チャンスは1回とする。

ミスした場合は即不合格により艦を降りてもらおう。質問は？」

「ありません」

「では始める」

前進後退、方向転換、ジャンプ、火器管制、格闘などなど…チュートリアルでお馴染みの流れが終わった。

「良いだろう。合格だ。次に模擬戦闘を行う。3機編成でこの着艦

デッキに突入出来れば合格だ。2機は志願兵01の援護を行う。敵はザンジバルと私が指揮するMS-14量産型8機。模擬弾装填のビームライフル。ミニマム出力のビームナギナタを使用する。高機動型を持ってすれば楽勝だ。スタート位置まではオートパイロットで移動する。質問は？」

「戦闘空域は？」

「これより、ペキン打上ポイントに移動し、打上後に東アジア上空宙域で行う。他に質問は？」

「有りません」

「では、そのまま待て」

再びオートパイロットが点灯した。機体は二足歩行して、固定用のベッドのような物に背中からハマった。

ペキン打上ポイントに移動中の表示がしばらく続き

打上準備中

で、座席の背中に体が押し付けられた。座席が上を向いているらしい。

打上

で座席が揺れた。

揺れが収まると、教官がモニターに現れた。

「志願兵01！ただ今よりスタート位置に移動する」

模擬戦闘は、よくあるガンダムゲームよりも難易度が低く、あっけなく着艦デッキは陥落した。

「よくやった。見事な操縦だった。名前を聞こう」

教官は態度が変わっている。

「ツチハタ アキラ です」

「よし。ツチハタ志願兵。私は、デイク大佐である。 総帥府特命により、V作戦阻止部隊隊長を務めている。 只今よりツチハタ志願兵を、優秀により当部隊に編入する。 辞退するならば、今おこなえ。 作戦説明後は辞退不能だ。 ただし、ここでセーブして中断可能だ」

「ではセーブ中断を要請します」

「よし。 要請を受理する。 必ず戻れ」

教官の画像が消え、セーブ中の文字が出た。 全周囲モニターでは、機体が着艦デッキを出てHLEVに入った。 大気圏離脱突入ができるカプセルだ。 HLEVは大気圏突入した後、ハッチを開いた。 ゲルグはゲームマーズフロントの屋上に飛び降りて、天井が閉まり。 ゲームは終わった。

ハッチが開くと、土畑は聞いた。

「この後セーブポイントは？」

「クリアするか、撃墜されるかだな」

土畑はドーム匡体を出た。

「明日は日曜だから、出直すよ。 何時から入れる？」

「別の作業が徹夜で有るから好きな時間に来てくれ。 エレベーターで地下2階に降りたら250ccが有る。 キーは差しっ放しだし、メットもグラブもシートに乗っかってる。 トンネルの先の鉄扉は自動で開くからな」

土畑はゲームの最前線から離脱した。

―次話！

―第4話元カノ

―第4話元カノ

―第4話元カノ

中島のXR-230（ホンダの中型二輪）で、地下2階からトンネルを抜けて、外に出た。

長良川を渡る鏡島大橋に登って行く坂で、また携帯がバイブした。渡りきった所の駐車場に寄せて、携帯を開いた。着信を見て、電話を掛ける。

「歩美^{ふみ}?。また飲んでるのか?もう11時半だぜ。よい子は寝る時間だろ?」

ザワザワと話し声がしている。明らかに飲み屋で、歩美は酔っ払っている。

「あゝ?。ゲーム馬鹿?…今すぐPSの電源切って、まひるに來なさい。セーブなんかするんじゃないの…わかってる?」

まひるは、歩美の行き着けのバーだ。

「いま鏡島大橋で、帰って寝るんだよ」

「近いじゃない。10分あれば楽勝楽勝…」

ゴソゴソして声が変わった。

「もしもし。お電話代わりました。ママですけど」

「はい」

「白石歩美^{しらいしふみ}さん1人でみえて、ちよつと足元が危ないので、お願いしたいんだけど…」

「わかりました。ご迷惑かけてすいません。30分はかかりますけ

「ど良いです？」

「うちはぜんぜん構わないんだけど、女の子だからねー」

「彼氏はどうしたんです？」

「別れたんだって、今日。荒れちゃってるのー」

「分かりました。第1戦速で向かいます」

「ごめんね。お願いしますー」

どいつもこいつも行き詰まると呼び出して来る。携帯を切って、土畑は肩で溜め息をついた。

家に中島のバイクを置き、タクシーでまひるに横付けした。

「どうもすいません。回収係です」

勢いでカウンターから引き剥がさないと、歩美は動かない。和服のママと旦那のマスターが両脇に手を入れる。歩美のバックとコートをホステスから受け取り、イスを引く。

しかし一瞬の遅れで、歩美はカウンターの端をつかんでしまった。

歩美は、スキージャンプの助走スタイルで踏ん張って、イスを引き戻した。

「あたしは〜K点は越えないよ！わかった〜みんな座って！」

「なに言ってるんだよ。よい子は帰るんだよ。お店は終わりだよ？。」

両脇にママとマスターが居るだろ？」

「あたしはね…よい子じゃあないの…つかみは良いけど、話してる疲れの女なの…ざけんな。ウソつくな。10も下の小娘にたぶらかされてんだよ。知ってただからね〜。知ってただよ」

「苦情は、署で聞こう。行こう」

歩美は突然立ち上がって両手を差し出した。ママとマスターは見事に床に転がった。ママが目で、今よ！と合図した。

「あ〜刑事さん、あたしが別れました。別れるつもりは無かったです」

「手錠は良い。行こうか…」

歩美を支えてなんとか店を出た。ママとマスターがホツとした顔で外まで見送ってくれた。

タクシーの中でも、罪を償い続けるので、運転手は笑いを噛み殺すのに苦労していた。震える手から釣り銭をもらって、歩美をアパートに押し込んだ。素早く逃げようとしたが、ヤッパリ捕まった。

「聞いて…ゲーム馬鹿デカ。あたしはね…」
そこで静かになった。見事に眠っている。玄関からベットに運んで布団を掛ける。12歳年下の元カノは疲れているようだ。振られる度に呼ばれる事3回目…タフな女だ。

外に出るとさっきのタクシーが待っていてくれた。

「お客さん。戻られるんでしょ？」

「ありがとうございます。上土居に行ってください」

「お客さん。ジオン好きですか？その帽子。ちよつと刺繍がかすれてるのが渋いですね」

運転手は同じ世代なんだろう。

「運転手さんは？どっちなんです？」

「どっち？。連邦にもジオンにも事情があります。全部が地球に戻って、人類が絶滅するか…全部が宇宙に拡散して、別の地球を見つけるかでしょうね。私はどっちって言うより、ランバラルですね」「仇討ち隊ですね。なんでキシリアは補給を断ったんでしょうね？」「マクベでしょう。ドズル系の部隊には笑顔だつて送らないキャラです」

「そのかわりに、要らない所で核はおりましたね」

「ええ。おかげでホワイトベースの白兵戦になりました。孤立無援

で戦う事が、現実起こった時に思い出しましたよ」

土畑は苦笑した。

「それも、何度となく？」

「…ですよね。ランバラルは戦死しましたが。現実では、生き残って繰り返し返すとは…」

「死ななかつたら、セイラについて連邦に寝返ったかもしれないですね」

「いやいや。それだから死んだんですよ。サビ家が支配していても、サイド3はジオンズムダイクンのコロニーですから。どちらにもつけないってところですね。男だランバラルは…」

「男ね…現実だと、幾つ命が有っても足りない」

「死にたくないですよね…本音は」

タクシーは自宅に到着した。

翌日。

ビービー鳴る音で目が覚めた。ルーブリーフの表紙の上で携帯が移動している。右手でつかんで、耳に当てた。

「はい。土畑で…」

「ゲーム馬鹿？何寝てんのよー」

「歩美さ〜。初代元カノから、そろそろ卒業しろよ。あきらめて俺とするか？」

「何を云うかと思えば…ガンダムオタクのゲーム馬鹿なんてお断りー
「だったら俺の番号を消去したらどうだ？。俺を保険にしているから脇が甘くなるんだよ」

「保険になんかしてないの…どうでも良いけど、今日は付き合いなさいよー」

「惜しいな〜。今日は中島のところで、テストプレイだ。可愛くして、名古屋でナンパされてきな」

「例のゲーセンね。あ〜云う不良企業家は、その内に法に触れて自

滅するわよー

「気を付けるように言っとくよ」

しばらく歩美は沈黙した。

「ねえ…。そのテストプレイって見学可能？」

「中島が良いって言えば、俺は大歓迎だ」

「そう。いま車で前にいるの」

土畑はベツトを飛び降りて、カーテンを開いた。ワゴンRの中に歩美が見えた。

中島のバイクでないと入れない為、歩美を説得してゲーマーズフロントに戻った。歩美の事を電話するのをすっかり忘れていた。

「そのミハル ラトキエ風の彼女は？」

匡体の中で溶接をしていた中島が遮光マスクを上げて聞いた。

「元カノの歩美さんだ。見学したいって言うんだけど？」

「あゝそう。好きにしてくれて良いけど。接待できないからそのつもりで…」

中島は溶接に戻った。

「ねゝミハルなんとかって？」

「第28話大西洋血に染めてで、戦死する女スパイだ。弟達の為にジオンのスパイになる。でも真実を知って、ジオンと戦うんだ。壊れた発射装置の手動ボタンを押して、ミサイルの発射風圧で海に飛ばされる。名場面のひとつになってる」

「可愛い？」

「中島が歩美に似てると思ったんなら、そうだろう」

歩美は不満そうに言った。

「中島さんじゃなくって」

「歩美はさ…そこに問題はないんだよ」

「何よ…ワガママ？」

「違うな。俺も歩美も逃げてるんだ。本気で愛し合う事を」

「私はチャレンジしてるつもりだよ」

「話は信じるが。結果がすべてなのでな」

歩美は黙った。代わりに中島がコックピットの中から言った。

「キシリアの名ゼリフだろ？。おふたりさんは考えるから駄目なんじゃ？感じればいいのよ」

「考えるな感じる主義のお前はバツ3じゃないか。言われたくないな」

「だが、3話完結してる。おふたりは、連載中断だろ？。とっとと完結させる」

中島は、匡体の中から溶接棒を持って出て来た。

「とりあえず。ジオニック社風のコックピットにしてみた。まあ、ジオンは全周囲モニターじゃないけどな。テストプレイしてくれ」

土畑は、匡体の中を覗き込んだ。

「歩美。そっちにカップコーヒーの自販機がある。パソコンにプレイ画像が出るから、良かったら見ててくれ」

「すぐ終わる？」

「設定を完璧に再現したホワイトベースクルーが相手だ。俺がやられるなら、秒殺だ。勝つなら、昼飯も夕飯も抜きだ」

「たかがゲームで？」

「そう。たかがゲームでだ」

土畑は、ジオン風のシートに身を沈めた。

次話！

― 第5話テストプレイ

―第5話テストプレイ

―第5話テストプレイ

ザンジバルの着艦デッキに入ると、さつそくデИБ大佐が正面モニターに現れた。

「よく戻ったツチハタ志願兵。これより作戦ブリーフィングを行う」
デИБ大佐の画像の右側に図が出る。

「我々は、東アジア上空。木馬は、ルナツィを発してムーア経由ルートでソロモンに向かっている。我々はソロモンとムーアの間で会敵してホワイトベースを制圧する。何か質問は？」

「出撃編成は？」

「高機動型11機密集隊形と、分散ルート別が選択可能だ」

「11機密集隊形で、艦橋直撃ルートを選択します。全機メインバニアフルスロットル。ビームライフルは間欠牽制発射」

「セットした。制圧手順を説明する。木馬に取り付いたら、メインメニューからイジエクシオンを選択。ノーマルスーツモードに移行する。操作は変わらない。前面ハッチが開き、背中の小型バーニアで木馬艦上に降りる。装備は、サブマシンガン予備弾倉2。エアロック破壊用爆弾1。手榴弾3。木馬のブリッジ中央、艦長のコンバットチェアの前に立てば制圧となる。質問は？」

「ゲルググ全機に、木馬の装甲を貫通できる爆薬の携行は可能ですか？」

「メインプログラムに照会するので待て……。可能だ。ただし、ブリッジを破壊したら作戦は失敗となる。あくまで、制圧し、る獲する。」

他には？」

「有りません」

「では。そのまま待機。作戦開始を待て」
デイク大佐は消えた。

匡体の外では、中島と歩美がパソコンのモニターを眺めていた。

「ほとんど何言ってるんだかわかんない…でも、デイク大佐ってしっかりツチハタ志願兵と会話してる。なんで？」

中島は右手人差し指でオークレーの真ん中を上げた。

「完全音声認識すごいでしょう。CPUは、ほぼ人間と同じ仕組みで会話してる。詳しく説明すると…疑似神経ニューロンネットワークによる言語野形成…」

「ストップ！。日本語じゃないとわかりません」

「あゝ日本語で言うと、能登島式完全会話プログラムで会話してる」

「へー天才だね。能登島って人」

「天才ってより、システムとプログラムの職人だな。AからDに、いきなり飛ぶのが天才なら、ABCを離れ業でしっかり経由して、Dに至るのが職人だな」

「どっちも普通じゃないね…」

中島はモニターから目を離して、歩美の横顔を見た。疲れ果てながら何かに希望を見いだそうとしている顔を。

「なんで土畑と結婚しないんです？」

「離れてると恋しくなる…一緒に居ると邪魔って言うか、腹が立つてケンカになる」

「成る程ね。白馬の王子様じゃない男に恋したわけ？そりゃあハドルを取り替えない限りゴールできないな…サッサと替えたら？」

「バツ3のアドバイスをありがとうございます」

中島は肩をすくめて見せた。

「作戦開始みたいよ…」

「木馬を捕捉した。艦橋直撃ルートにザンジバルを回り込ませる。ポイントまで、15秒」

フライトオペレーターがアナウンスする。発着艦デッキのドアが開いてゆく。

「5 4 3 2 1発艦！」

デッキが後方に一気に流れた。

中島はモニターを見つめながら首をひねった。

「いくら高機動型が速いつて言ったって、アムロ レイはコースを讀んで来る。密集隊形でもホワイトベースに取り付く前に一機も残らない。あと…10秒でRX-78の射程圏…？」

歩美がモニターを指差して叫んだ。

「なんか離れた！」

中島はニヤつと笑った。

「中島さん何？」

「うまいっ！。能登島のミスを突いた」

「どういう事？」

「離れたのは、パイロットだ。射程圏寸前でイジエクシオンして、ノーマルスーツモードに入った。ノーマルスーツモードのライフゲージを減らすには、アムロもイジエクシオンしてノーマルスーツモードに入らなければならぬ。しかし、ゲルググ11機を放置すれば、艦橋が吹き飛ぶ…」

「でも、破壊したら失敗でしょ？」

「クルーは完全再現されてる。アムロは仲間を見捨てない。残り時間から見て、ギリギリで11機を破壊するか、進路を変えられる。」

その時間で、ツチハタ志願兵達は艦内に侵入できる。アムロ レイ

は突破した…もつとも、現実にはゲルググからイジエクシオンしたら、ノーマルスーツのバーニアじゃあ、ホワイトベースに激突して即死するか、激突しなけりゃあ永遠に宇宙を飛び続けるだろな。これは、修正だ」

「あつ！エアロックを爆破した！」

「アムロは最後の機を止めたけど、間に合わないな」

モニターは艦内の白兵戦に移行した。

「…1人足りないな…」

「誰？」

「ブリッジの窓だ！」

中島は、キーボードを打って視点を切り替えた。艦長のブライトノア視点と表示された。

窓に、デジタルタイマー付きの筒が貼り付けられている。タイマーは20から、カウントダウンしてゆく。

「総員退避！ブリッジから出るんだ！」ブライトノアが絶叫する。

「ブライトあなたも！」

ミライ ヤシマの顔が画面にアップになる。

「艦長が持ち場を離れてどうする！」

他のクルーは、退避するためブリッジのドアを開いた。

そこに、ツチハタ志願兵を先頭に10人のジオン兵がなだれ込んだ。

「ブライト艦長。申し訳ないが艦のコントロールをお渡し願います」

ブライトは窓を見た。カウントは0で止まっていた。そのそばで、ジオン兵が笑っている。

「やられたな」

その画面に、ミッションコンプリートの文字が出た。

「損失。ゲルググ11機。戦死者0人。ホワイトベース損失。MS
0機。戦死者0人」

「戦死者なし？」

中島は、ゲームログを開いた。

「緊急用の隠し通路で、艦橋階層まで上がってる。こんなもんがあるなんて、どのガンダム本に載ってるんだ？」

「本人に聞くべきね」

匡体がバシユツと音を立てて開いた。

次話！

― 第6話謎のケーブル

―第6話謎のケーブル

―第6話謎のケーブル

土畑はビツシリ汗をかいて、匡体から出てきた。

「お疲れさん！。とりあえず初クリアだ」

中島は、右手を差し出した。その手をバシツと握って土畑は、パイプ椅子に体を投げ出した。

「バグが2点…高機動時のイジエクシヨンが可能な事。偽爆弾にミライさんが気づかなかった点。彼女の洞察力はそんなレベルじゃない」

「ゲームログを能登島に送つとくよ。他には？」

「白兵戦で、乗組員の抵抗が弱すぎる」

「違うだろ？。緊急用の隠し通路を使ったからだろ？。あんな物どこのガンダム本に書いてあったんだ？」

「ランバルルがホワイトベースに突入した時、セイラが迎え撃つためには、あの通路が無いと無理だって、能登島さんがブログに書いてた。有りそうな場所の壁を爆破したら出てきた。問題点は、その通路が最後まで無人だった。防御側が使わないのはおかしい」

「成る程。戦死者0人の訳だ」

「もう1点。イジエクシヨンした後、変なノイズが、全周囲モニターにも音声にも時々入った。ハードの方だと思う」

「調べてみるよ」

土畑は、歩美を見た。

「どうだった？。俺のゲーム馬鹿振りは？」

「すごいけど。これだけの事、使う方向を間違えてない？」

土畑は目を閉じて笑った。

「すごいって言うてくれただけで、ありがとを言うよ。少なくとも、これがコンピュータゲームで、実戦じゃないだけでも地球に優しいと思うけど？」

「不満だな…汗かく程真剣でさ」

土畑は遠くを見た。

「歩美は、俺に真剣さを求めているのかな…。歩美自身が真剣になれないで悩んでるように見える。真剣になる必要なんてないのにな…好きな人を素直に大切に思えばいい。彼女はこうでなきゃとか、恋人関係はこう有るべきだとか、彼はこうしてくれなきゃとか。そんな事はどうだっていい。わかんないだろうけど…」

「わかんない。なら、私を素直に大切に思ってる？」

「それを聞かなきゃわからないようじゃギブアップだ。帰ろう。腹へったし」

中島は、能登島にデータとメールを送っている所だった。

「送迎バスを使ってくれ。家まで送らせるよ。バイクは使うから」

土畑は顔をしかめた。

「あの兵員輸送車でか？」

「問題が？。もう運転手には言ってるから…」

「わかった。じゃな…行こう歩美」

土畑と歩美がエレベーターのドアに消えると、中島は何気なく匡体を見た。

「あれ？。なんだアノケーブル…」

匡体の天井から、フロアの天井に白いケーブルが伸びている。中島

は工作台を匡体に寄せて、匡体の天井に上がった。

ケーブルは匡体の天井に網状に広がってくっ付いていた。上も同じようになっている。引っ張ってみたが剥がれない。

「いつの間に…ノイズの元っばい…」

そう言った瞬間に、中島は吹き飛んだ。ケーブルの両端が爆発して外れたのだ。中島は机の上の書籍の中にソフトランディングして気絶した。

そして、そのケーブルは、ゲームーズフロントのすべての匡体に貼り付けられていた。

土畑と歩美は、バスの前で揉めていた。

「こんな恥ずかしいバスに乗れる訳ないでしょ！あたしまでゲーム馬鹿に思われちゃう！…何見てるのよ！」

土畑は上を見ていた。

「煙りだ。ちよつと中島を見てくる」

最上階の排煙装置から、白い煙りが見えた。

「私も…」

ビルの中に戻ると、火災報知器のベルが鳴り響いて、スタッフが避難を誘導している。

「最上階だ！。煙りが出てる！消火器は？」

男性スタッフをつかまえて土畑は怒鳴った。

「こっちに！」

階段で10階まで、7人が消火器を持って上がった。

ドアを開けて飛び込むと、スプリンクラーの雨の中で、中島が机の上にあお向けで倒れていた。

中島の手にはケーブルは握られてなかった。だが…それは土畑には知るよしもない。土畑は、中島の右手の両側がやけ焦げているのを見た。

次話！

― 第7話 ハッキング

― 第7話ハツキング

― 第7話ハツキング

「中島っ！中島っ！…！」

土畑と歩美が上から覗き込んでいる前で、中島は顔をしかめた。スタツフにも安堵あんどの表情が浮かんだ。

「救急車は…呼んでないだろうな？」

あえぎながら、中島は言葉を発した。

「俺がスタツフを止めた。そこらへんの物が安全基準を満たしているとは思えん」

「すまん…！」

「とりあえず、脚立きゃたうから落ちた事にして病院には行った方がいい…立てるか？」

ムウツツと言う気持ち悪いうめきを上げて中島は体を起こした。

「どうだ？」

「さあな…。ひどい寝違いした朝みたいだ…」

「とりあえず、スタツフさんと病院に行こう」

「そうする…！」

中島はハツとして、右手を見た。

「どうした？」

「ケールは？そこらに落ちて？」

「いや？。ないぜ」

「まあいいか。肩を貸してくれ」

中島は周りを見ながらスタツフに助けられて、出て行った。

「中島さん。なんか気にしてたね」

「ケールが燃えたのかな？そこで……」

焼けている机の上を土畑は見た。

「変な焼け方だね。右手の両側だけ……火傷はしてなかったよね？」

「ケールが燃えたとしても、ここじゃ燃えないだろう。燃え尽きたか？」

「ないよね。燃え残りとか？」

土畑は、何か違和感を感じた。中島と出て行ったスタッフは1人……今スタッフは7人。確か一緒に上がったスタッフは7人。1人多い。

土畑は視線を走らせた。左端の男が左手を後ろに隠している。

「じゃあ、僕らは帰ります」

「ありがとうございます。社長の方から、また連絡させて頂くようにします」

土畑は軽く会釈して、左端の男の横を通った。素早く見ると、両端が茶色い白い物を視界に捉えた。黙って、エレベーターに乗った。

「ねえ……」

何か言おうとする歩美に、小さくアゴを振った。土畑を見つめて、歩美は黙った。バスまで来ると、運転手が心配そうに外に立っていた。

「何があつたんです？」

「ケールが燃えたらしいんだけど、残骸がない上に、中島は吹き飛んだみたいだ」

「とりあえず、自宅まで送りますよ」

土畑は小さく黙ってと歩美に囁いた。

自宅に着くと、向かいの旦那さんが驚いていたが、笑顔で流して、歩美のワゴンRに乗った。

「飯でも食おう。場所は任せる。お互い言いたい事があるし…」
「うん…」

サイゼリヤに入って、店員が去るまで歩美は黙っていた。

「何！あのスタッフ！なんで燃えたケーブル隠し…！」

土畑は立ち上がって、歩美の唇を押さえつけた。

「丸聞こえだよ。落ち着けよ…」

歩美は、土畑の手をもぎ取って、小声で言った。

「やばいんじゃない？。あのスタッフなんかやってるよ！」

「あのスタッフだけなら良いけど、もつといたら俺達も危ないな」

「ねえ、何やってると思う？」

「あそこのゲームはみんなオリジナルだから、プログラム盗んでるつてとこか…」

「わざわざケーブル繋いで？。そんなわかりやすいかな？」

「あのビル、外からのセキュリティは完全だと思っよ。中からじゃないと無理なのかもしれない。」

「だとしたら？どうする？」

「中島に教えて、ヤツが対策するだろう。ヤツのゲーセンだし」

「じゃ電話しなきゃ！」

「病院内は、携帯禁止だろ？」

「ダメ元で掛けてみようよ」

土畑はコールしてみた。

「…電源が切れてるか、電波の届かない所にいるそうだ」

「メールは？」

「打ってみるよ…」

土畑がメールを打っていると、グランサツソの鷲の巣スパゲティと、シャーレンナランテ風プリマベラスパゲティが運ばれて来た。

「とりあえず食ってから…だな」
土畑が5回目のフォークを口に運んだ時、携帯がバイブした。
「メールだ…」

: Message
やばいたすけてく

END

覗いていた歩美と一緒に土畑も固まった。立ち上がるうとすると、
またバイブした。

: Message
土畑さん。話し合いましょう。このまま知らぬ顔で逃げる事をお勧めしますが…そういう方でない事はよく承知しています。ワナだと覚悟の上で、ゲームーズフロントまでおいで下さい。我々としては、警察に通報して頂くと好都合です。すでに我々が取り込んでますのでね。

ローラン ブリティス特務大佐

「中島さんって、こういう冗談やる人？」
土畑は首を振った。

「あいつの冗談は、もっとセンスが無い…強力な正義の味方を頼まないで、俺達だけじゃやられる」

「警察よ！ふつう」

「この最後の一文が張ったりだと思っか？」

「書かない方が、通報するよね…」

「助けは、彼しかいない……」
土畑は、新規作成を開いた。

次話！

―第8話サイバネティック アタック
ゲームクリエイター能登島秀彦登場！果たして、ブリティス大佐と
はたちの悪いゲームマニアか？企業スパイか？能登島のバックアッ
プの下、中島を助け出せるか？

Ⅰ 第8話サイバネティックアタック

Ⅰ 第8話サイバネティック アタック

土畑は、能登島秀彦宛てにゲームズフロントが乗っ取られた事をメールした。30秒後に返信がきた。

: Massage

土畑さん。詳細を検索しながら、そちらに向かいます。そちらのGPS位置は確認済みです。20分で駐車場に到着予定です。白のキヤラバンです。

土畑と歩美は、スパゲティを平らげて駐車場で待った。

ぴったりに20分で、白いワンボックスがサイゼリアの駐車場に入ってきた。

しかし、運転席にはガタイの良い外国人が座っている。

「能登島さんて、ハーフなんだね……」

「まさか…違うよ」

外国人は、助手席を開け、シートを起こした。

「ここからナカ、ハイル オーケー？」

歩美は外国人の顔を見てビクリしていたが、土畑が中に押し込んだ。

中は、両側テールすべて、電子機器で埋まっっていて、真ん中のスペースに能登島が居た。

「あのドライバー、元WRCのシュバルツ ピットマンでしょ！？
5連覇チャンピオンの…」

歩美が泡を飛ばさんばかりに能登島に言った。

「これはうれしい。WRCファンとしては、何よりの挨拶です」
土畑が割って入った。

「すいません。能登島さん。初めまして、土畑です。彼女は元カノの歩美です」

「よろしく。歩美さんも」
能登島が手を差し出したので、狭い車内で、腕をくねらせて握手を交わした。

「これはいったい何です？」

土畑は車内を見渡した。

「仕事部屋です。以前に自宅の仕事部屋が襲撃されたので、常に移動させる事になりました。独立して資金的にも余裕が出たので…。ピットマンとは、5年契約で働いてもらってます」

土畑は詳しい経過を説明した。能登島は表情を変えずに、PCのキーボードを叩いた。

「ゲームズフロントのマスターコンピューターにアクセスしてみ
たんですが…外部からのコントロール下に有りますね…」

「ブリティス大佐ですか？」

能登島はモニターを指差した。

「マスコンにコマンドを出しているのは…上空40kmかぁほぼ宇

宙ですね」

「つまり？」

「まず人類じゃなさそうですね…」

土畑は固まった。

「…見て下さい。上空40kmの発信元に侵入してみたんですが…コンピューター言語の変換やつてますね。その先の言語は、ビルゲイツの権利に抵触しませんね。地球上のあらゆる権利にも…」

歩美が何気なく言った。

「能登島さんの世界じゃ良く有る事なんですか？」

「初めてです」

土畑は天井を仰いだ。

「まとめると、ブリティス大佐は本物の宇宙人で、何らかの目的で中島のゲーセンを占拠した？」

「少なくとも、地球上の組織や個人とは無関係です」

「シャドーに連絡しろとでも？」

「あゝテレビドラマ？謎の円盤UFOでしたっけ…サンダーバードのスタッフが撮った奴でしょ？あんなのが現実に有ったらもう排除してるでしょ。残念ながら、僕らでやるしかないですね」

「国家の組織とかは？」

「都市伝説で言われてる程予算は出てないですよ。領事館程度の規模のようです。…向こうの方が技術レベルは上です。と言う事は…」

歩美が言った。

「オペレーターが目的？」

「そう。ゲーマーと呼ばれる連中の勘と反射速度…」

「何に使うつもりだ？」

能登島はモニターを切り替えた。

「この無数の点ですが…ゲーマーズフロントの匡体と同期してます。拡大してみます…」

土畑と歩美が能登島の後ろから、顔を入れた。画面には、人型ロボットが光線銃を発射している画像が拡大された。

「マジかよ。悪夢ってのは…これはリアルタイム画像？能登島さん…」

「戦ってるようですね。これは生中継です」

「まてよ…」

一方的に撃たれて、両腕が吹き飛んだ人型ロボットの腹の部分が開いて、人が飛び出してきた。

「相手は、人が乗ってるじゃん。ゲームやってる子供に殺人させるのか！ブリティスの野郎！」

「ヒドイ…爆発したよ」

歩美がおびえた。

「冷静に、対抗策を立てましょう…まず、一機人型ロボットをこっちのPCにハッキングします。それでもって、ブリティス大佐側の通信施設を破壊します。キーボードでの操作になりますけど…土畑さんやれます？」

「反応が鈍いですよ。キーボードじゃあ。PSのコントローラーとか無いんですか？」

「残念ながら…待って…近くに戦場の絆が有るゲーセンが有ります。一台使わせてもらいましょう。3号機の筐体が修理中です。プログラムにバグが有って、定期的に起動しなくなるようです。こっちでプログラムを書き換えます。3分ちよとかかります。降りて、うまく3号機に入って下さい」

「オーケー、ドライブしましょ」

土畑は、助手席に這い出てワンボックスを降りた。太陽の光がまぶしい。

「どこなんだよココは？」

とにかく土畑は、ゲーセンの中に入って行った。

戦場の絆の筐体を見つけて、3号機に入ろうとすると肩をつかまれた。振り返るとメガネの大学生が口を尖らせた。

「順番守りましようよ。みんな並んでるんだし。それに、これ調整中って紙張ってますよ?」

見ると並んでる連中がにらんでいる。

「そんな場合か」

と言う言葉を読み込んで、仕方なく列の最後尾についた。

「おじさん階級は?」

前の茶髪の男が聞いてきた。

「小尉だ。戦場の絆は一年振りだ」

「けっこうやるじゃん。オレ伍長から上がれないんだけど、アドバイス下さいよ」

土畑は面倒くさいと思いながら言った。

「とにかく長距離型を一秒でも早く見つけて、撃ち続ける。味方の拠点はダメージを受け無いし、敵の近距離と中距離が長距離を救いに来れば、味方の長距離はフリーで敵拠点を潰せる。それで圧勝だ」

「へえ。やってみますよ。おっさんありがとね」

「気にすんな」

「はい」

「土畑さん。トラブルですか? 3号機に姿が見えませんが?」

「順番待ちの列が出来てまして。ここの連中いまだに攻略してなくて、混んでるんですよ」

「分かりました。では、スプリングラーを使います」

「能登」

いきなり、水が降ってきた。

「... やっちまったか」

携帯ゲームが入っているカバンをかばって、アツと言う間に誰も居なくなつた。土畑は、ずぶ濡れになりながらゆっくり、3号機のドアを開けた。

次話！

！第9話対艦戦闘

―第9話対艦戦闘

―第9話対艦戦闘

扉に入る前に、入口のシャッターがガラガラ降りて行くのを見た。閉まって行く隙間から見える、バイトの店員が客に揉まれている背中から視線を剥がした。

シートに座って、土畑は言った。

「後処理はどうするんだよ……」

コインも入れてないのに、3号機が起動した。

―土畑さん。スタッフ控え室の窓から逃げて下さい。さもないと、逮捕されます―

「しっかり記憶しときます。ガタガタ言ってる場合じゃないんで―
―ではですね…操作は同じです。ただし、画像は0.25秒のタイムラグがあります。同じく、筐体側の入力も0.25秒遅れます―
「つまり…回避は最速でも0.5秒遅れる…それに、ハードの反応速度を入れると、1秒くらいですか？」

―ハードに脊髄反射回避システムが有るようです。1秒以内の危険は自動化されてます―

「偏差照準は、1秒以上かあ……」

―そうです。それから、目標に向かって矢印と距離を出します。他に質問は？―

「通信施設の位置は？」

―不明です―

「敵は？」

―目標付近に、ロボット兵器は居ません。迎撃砲やビームライフル

はありますが、艦体に取り着けば射界から外れます。――

「じゃあ繋ぎましようか！」

――分かりました。5カウントで。5・4・3・2・GO――

下に地球が見える。矢印は進行方向に有った。

――土畑さん。推進剤メーターに注意して下さい。ゲームのように0になっても、回復しません。宇宙ですので噴射し続ける必要はありません――

「機体操作のバーニアは自動でしょ？」

――そうです。メインエンジンは入力が必要です――

「了解。目標が見えてきました」

白い円筒形が徐々に大きくなってきた。細部が見えてきて、砲門らしきものが並んでいる。土畑は、艦尾の噴射口に機体を向けた。噴射口に迎撃砲は無いはずだ。回り込んで、艦尾から進入する。迎撃ビームの弾幕は有るものの薄い。

――一度スルーしましょう。スキャンしてみます――

土畑は噴射口から、艦体を舐めるようにロボット兵器を飛ばした。窓はなく、大小様々な構造物が流れ去って行く。迎撃砲の砲門の下に行くので、弾幕は上を通り過ぎる。10秒で艦首に達して、機体の向きを変えた。

――通信施設を発見しました。矢印を出します――

モニターの矢印は、真下を指している。距離が3000mと出ている。

「これは、艦の裏側？」

――全体マップを出します――

艦の縮小画像が出て、赤いポイントが点滅した。

「移動する」

土畑は、メインエンジンを2秒間噴射させた。

艦を回り込んで裏側に入ると

近接警報

の赤い文字が点滅した。土畑は回避運動を始めた。

「土畑さん。ブリティス大佐ですー」

画像にブリティス大佐が現れた。

宇宙服のような物を着ている部長タイプの男が言った。

「喰えませぬね。こんな事をされるとは遺憾です。私を困らせない方がいい。すぐにやめるよう勧告しますー」

土畑は顔に怒りを込めた。

「子供達に殺人をさせるな！お前らのゴタゴタは、自分達で始末しろ！」

ブリティス大佐は、鼻で笑った。

「どのみち、殺人ゲームじゃないか？ついでに利用させてもらっているだけだ。みんな喜んでやってるー」

土畑は、ブリティス大佐に指を突きつけた。

「相手のパイロットが生物だと知らないからだ。ゲーマーはな、人も生き物も傷つけたりしない。殺したりしない。ゲーマーは、撃つていい物と撃つてはいけない物を知っている。知らないのは、軍のリクルートに世論操作された子供達だ。正義の為ならとね。モニターと肉眼、コントローラーと素手の区別がつかないのは、ゲーム中毒じゃなく別の病気だ」

「そうは言うが？人であろうが、パラメーターの固まりであろうが、殺人に喜びを感じてるんじゃないのかね？」

「もう一度言う。ゲーマーは、人を殺す事に喜びを感じない。ゲームクリエーターの作った問題を解くだけだ。それに喜びを感じる。」

ブリティス大佐：あんたは外交的破綻を暴力で圧殺する事に喜びを感じている。相手の都合は悪で、自国の都合は正義と名づけて：自分を正義のヒーローだと酔いしれて。言っておく！そんな世界は、戦争でしか維持できない。いつか敗れ去る日が来る。せいぜい200年程度の幻だ」

「新手の反戦主義理論か？新鮮味を感じんな。軍隊も戦争も無い世の中などファンタジーだ」

ブリティス大佐は身をよじらせて笑った。

「軍隊を使わない。戦争をしない世界は、ファンタジーじゃない。単なるコミュニケーション能力の欠如に過ぎない。消しゴムを忘れて、「貸して」と言えずに奪い取る子供と同じだ。戦争なんて、みんなその程度の話だ」

ブリティス大佐は、ムツとした顔をした。

「侮辱はそこまでにしてもらおう。もはや容赦しない。しょせん、弱者は歴史から消え去るしかないのだよ」

土畑は、ビームライフルを連射しながら、ブリティス大佐に向かってシールドを投げた。

大佐は、ビームセイバーでシールドを、上から切り裂いてしまった。2つに裂かれたシールドの上から土畑は、ビームセイバーを振り下ろした。ブリティス大佐の切り返したビームセイバーはシールドに邪魔された。土畑は、背中のメインエンジンを切り取った。推進剤が漏れだし、ブリティス大佐は移動能力と運動能力を失った。引火を防ぐために、メインスイッチを切って、ブリティス大佐はイジェクションした。

一瞬で勝負は決した。

「土畑さん。子供達のロボットが来ます！ー
近接警報が遅れて点滅した。

「能登島さん。もうミッションクリアです」
土畑は、通信施設にビームを打ち込んだ。

次話！
I 第10話反擊

―第10話反撃

―第10話反撃

ビームは、艦体装甲に穴をブスブスと開けた。穴から、パラボラアンテナらしき構造物が見えた。

ドンッ

と振動がモニターをブレさせた。艦が弾かれたように前進を始める。

「逃げるしかないよな。ロボット兵器の通信が切られたら」

―土畑さん。機体を今居るゲーセンに向けて下さい―

「どうして？」

―ブリティス大佐がセカンドカーでこっちに向かってます―

土畑は青ざめた。

「能登島さん！とりあえず逃げて下さい。僕はなんとかします」

―いや！すぐに車に戻って下さい―

ドンッ

音と振動の後、天井からバラバラと何かが降ってくる音がした。

「能登島さん！オレのモビルスーツがここに来るまでの時間は？」

―17分7秒ですが、ブリティス大佐はもう玄関です。逃げて下さい！申し訳ないがこっちは退避します―

「すぐに行って下さい！」

バリバリと言う破壊音が周りを圧した。土畑は、自分のロボットにショルダーアタック20連打のコマンドを送った。目標はブリティス大佐だ。

匡体の電源が落ちた。生でブリティス大佐の声が響いた。

「どうだ？気分は…ど素人のやれる事などタカが知れている。勝ったつもりで、ゲームオーバーか？本物の戦争を教えてやる！」

ドカツと言う音と同時に匡体の天井がへこんだ。

「いいか？私の部隊は全滅した。勝っていたのにだ！母艦は通信施設を破壊されて救援を呼べず、敵の追撃に遭っている。貴様のせいだ！」

ドンツ

天井がまた低くなった。

「どうだ？殺される気分は？自分の人生がゲームオーバーになる気分は？」

ガラガラ音がして、匡体が傾いた。持ち上げられている。

「どうするかな…投げるか？いや…振り回して、遠心力をご馳走してやるう。たっぷり味わえ！」

土畑は変形した匡体の壁に押し付けられ。内蔵が圧迫された。そのまま気絶した。

「うっくはっ」

気がつくと、スパゲティのお好み焼きが床に広がった。体を起こすと、廃墟と化したゲーセンビルの中に、首が出た。

見ると、コックピットハッチが開いたロボット兵器がひざまずいて、煙りを上げている。その横に、肩が壊れたロボット兵器が待機状態になっていた。

土畑はかろうじて破壊を免れた携帯を掛けた。

「能登島さん？」

「無事なんですか？」

「僕はなんとか…でもゲーセンは全壊で、宇宙人のロボットが2体に、ブリティス大佐は逃走中。とても無事とは言いたくないです」

「とにかく、警察が来る前に回収に向かいます。でも、どうして助かったんです」

「ブリティス大佐の弱点は、トドメを刺す前に、17分もおしゃべりする事。あの大佐に戦争は向いてない」
電話の向こうで、笑い声が漏れてきた。

土畑は痛む体を引きずって、廃墟から道路に離れた。野次馬が集まり始めている。能登島のワンボックスが来た。

野次馬の中で、さっきの順番待ちに居た茶髪が土畑を指差した。

「あのおっさんだ！あのおっさんがやったんだ！」

「少しは、まともな頭を使えよ伍長」

思いながらも、どうしようもできない。野次馬が迫ってくる。

しかし、降りて来たピットマンが土畑を素早く抱き上げて、肩に乗せた。野次馬を振り払って、助手席に押し込んだ。土畑を乗り越えて、運転席に入る。

キツキツキツキツキツキツキツ

迷惑条例違反のデシベルで、100人中100人が耐えられない不快音が響いた。

あっけなく、車の前が開きピットマンはアクセルを床まで踏み込んだ。

後ろに移ると、元カノが数年振りに抱きしめてくれた。

「本物の戦闘は痛むな…ゲームのやる仕事じゃない。でも、こういうご褒美が有るなら、悪くない」

「死んだと思った」

歩美は涙ぐんでいた。

「俺もだ」

せき払いして、能登島が割り込んだ。

「表彰式の最中に申し訳ない。ブリティス大佐が3台目を調達した」
土畑はこめかみを押さえた。

「まだやんのかよ？あの大佐」

「肩が壊れてますが、さっきのロボットを使います。上空500mで追尾させてます」

「米軍とか自衛隊とかスクランブル掛けてるんじゃない？」

「見て下さい。ニュースヘッドラインです。さっきのゲーセンは、ガス漏れで漏電による引火爆発になってます。政府も米軍もしらばつくれるつもりですね…」

「でっ。ブリティス大佐の次の一手は？」

「通信が入ってます…出します」

モニターにブリティス大佐が映った。15R戦ったボクサーのように顔が腫れている。頭に包帯を巻き血がにじんでいる。シヨルダーアタック20連打の効果は絶大だった。

「良かるう…取引をしよう。このまま引き下がれば、ゲームズフロントの社長を生かしておいてやる。もし、我が軍の邪魔を続けるなら殺す。子供達もな」

土畑は、ウェブカメラの前に顔を入れた。

「大佐。そうじゃない。中島社長を今すぐ解放しろ。さもないと、お前を地球から叩き出してやる！」

「そんな事が出来る訳がないー
能登島が代わった。」

「ブリティス大佐。ロボット兵器全機のパッキングが完了しています。すでに、あなたを包囲しつつ有ります。ゲームズフロント内の部下に撤退を指示して下さい」

「断るー！」

「では…こういふのはどうです？」

ブリティス大佐の顔に驚きが走った。

「なんだ！まさか、そんな。ファイヤーウォールが破れる訳がないー！」

「いやいや。じゃあ、全開右ロールから左にひねり込みにと…」

「クソツイジエクションせんぞー！」

「大佐。こっちでロックしてます。撤退の指示をお願いします」

「わかった！私の負けだ！止めるー！」

「では…止めます」

モニターの中で、ブリティス大佐はガツクリとうなだれた。

次話！

―第11話ゲームズフロント

―第11話ゲームーズフロント

―第11話ゲームーズフロント

ワンボックスは、ゲームーズフロントに向かっている。

「どうやって中の確認をするんです？能登島さん」

「大佐を確保してますから、そこを押しに行けばいいでしょう…ただ、ワナには要注意です」

「建物の外に中島を出させればどうです？」

「こつちに武装も装甲も無いので、姿はさらせません。エントランスに、こつちのロボットを突入させましょう。いわゆる威力偵察です。それで、向こうの出方が判明します」

「大佐はちゃんと、中に？」

「まだいますね…大丈夫です」

ブリテイス大佐が話しかけてきた。

―撤退は完了した。中島社長は最上階に居る。オレを解放しろ―

「確認してからだ。4回戦目が無いかどうか」

―無い訳ないだろう？終わらせたければ、オレを殺す事だな―

ブリテイス大佐は不気味な笑みを浮かべた。

「悪いが殺人者になるつもりはない…」

そう言う能登島の横で、土畑はキーボードを使って、ロボット兵器をゲームーズフロントのエントランスに突入させた。土畑のモニタ

「には、おびただしいいビーム火点が光っていた。

「やっぱりブリティス大佐だ。いったん退きますって…沈んだか…」
モニターが消えて、通信遮断の文字が出た。能登島がブリティス大佐に言う。

「撤退したにしては、ずいぶん弾をおごりますね〜ブリティス大佐？」

大佐はしらばっくれている。

「戦いは非情だ。2手3手先まで考えてあるー

「なるほど…こっちのコントロールを遮断して、自信満々ですか大佐？」

「そつだ。能登島君、君の車は捕捉した。今度は即座にトドメを刺させてもらうー

土畑と歩美が能登島を見た。能登島はニッコリ笑って言った。

「ブリティス大佐。確か…戦争中でしたね？お相手がみえたようですよ？」

「ぬぁに？」

30機程度のモビルアーマーがゲームアーズフロントの上空に現れていた。

ブリティス大佐のロボット兵器と絡み合って、大佐のロボットから煙りが出た。

「どうして位置が…知らせたのか？能登島あゝ覚えておくぞー！
大佐は宇宙に向かって、逃走を開始した。

別の軍人がモニターに現れた。

「誰かは知らんが、よくブリティス大佐の位置を知らせてくれた。
自分は、第7駆逐戦隊ニシザキ大尉である。官姓名を承りたいー

「私立地球防衛軍ツチハタ電子戦隊能登島大佐です」

「ノトジマ大佐。協力に感謝する。他に何かお返しをしたいが？何か有るか？」

「ゲームズフロントの看板が出ているビルを、ブリティス大佐の部隊が占拠してます。中の一般市民を助けてもらいたい」
「お安い御用だ。ご要望にお応えする」

別の飛行体が現れて、中から兵士が降りて来た。降伏を勧告すると、ブリティス大佐の部下はあっけなく両手を上げて出て来た。そして、飛行体に取り込み素早く空に消えた。

「じゃあ、中に行きましょう。中島社長が無事だといいですけど…」

中に入るとドーム型匡体から子供達が泣きながら出てくる所だった。歩美が屈んで小学生に聞いた。

「大丈夫？何かされた？」

「閉じ込められた。ゲーム機のドアが開かなくなつて、ゲームをしるつて…やだつていつたら、電気でビリビリされたよ」

「もう大丈夫よ。悪い人は逃げたから」

歩美は土畑と能登島を見上げた。

「能登島さん。誰かの親が訴えますね。確実に…」

「それをもみ消しに来る連中が絡んで、ややこしくなるが…まずは、中島社長です」

3人はカウンターを回り込んで、スタッフルームのドアを開けた。

狭い部屋に20人近くが縛られて、転がされていた。

1人の縄を解いて、後を任せ最上階に向かった。

階段を上がつて、ドアを開けた。

誰か居る気配はない。部屋の中は、それ程荒れている様子はない。蛍光灯は点いている。能登島は、ノートパソコンが起動している事に気付いた。

「土畑さん。開発用匡体の中だと思います？」

「匡体のドアが閉まってるんで、中に誰かいますね。無人だと閉まらないはずです」

「開けます」

能登島は部屋にゆっくりと入って、ノートパソコンに近づいた。

土畑と歩美は匡体の横で待機する。

能登島がキーボードを叩くと

ブシューッ

匡体のドアが開いた。

土畑は能登島がとつさに、後ろに跳んで這いつくばるのを見た。その上を光の帯が通過して、壁に火花を散らした。

土畑は匡体に張り付いて、歩美を見た。匡体の入口を挟んで恐怖で震えている。歩美の足元にある分厚いマニュアル本を土畑は指差した。

歩美は「無理」と唇を動かして、首を振った。その間にも能登島は撃たれている。

土畑は周りに使える物はないか目だけで、探った。

「チョバムプレート？」

中島がNATO軍の知り合いからもらったと称するお土産だ。本物かどうかは、わからない。本物なら地球上でもっとも信頼出来る装甲だ。

土畑は足元に立てかけて有る鉄板をソツと持ち上げた。匡体の入口より少し小さい。歩美もマニュアル本を胸に抱えていた。

土畑は歩美を見た。歩美も見返す。

「せーの」

と唇を動かす。

鉄板とマニュアル本が匡体の入口に投げ込まれた。

中で

バシユ

と音がして火花が散った。土畑は匡体の中に右足を踏み入れた。

「グワツ」

とうめきごえが聞こえる。続けて右足で踏み潰す。歩美も加わって、鉄板とマニュアル本の下で銃を床に落とすのが見えた。

鉄板とマニュアル本をどけると、ブリティス大佐が気絶していた。

「生ブリティス大佐だ。今の内に縛り上げるんだ」

匡体から引きずって出し、延長コードでグルグル巻きにする。

「向いてないよ。軍人には…」

起き上がって来た能登島がうんざりした顔で言った。

土畑は、匡体の中を振り返ると、シートの裏に足が見えた。

「中島…」

土畑が駆け寄って、覗いた。

「見事だ…あの連中を跳ね返すとは、奇跡としか思えない…さてはニュータイプか？」

割れたオークレイの奥の目は笑っていた。土畑も笑って首を振った。

「能登島さんさ。オレはベタのオールドタイプだよ。生きてて良かった。ロープをすぐ切ってやる。待ってる」

能登島がパソコンのニュースサイトを開いて、手招きした。3人がモニターを覗き込む。

「今終わったばかりだったのに…」

ーゲームセンターに謎の武装集団 客の小学生が一時監禁される
現在武装集団は逃走 監禁された小学生恐怖を語るー

「この国はどうなってるんだ？」

土畑はうめいた。

「やろうとすりゃあ、報道なんてどうにでもなるって残念な話だ」
中島が沈んだ声で言った。

「この先、国は当てにならないのね…」

そう言う歩美を土畑は見た。

「官僚は、やれるならやっていると言うのかな？なら…」

土畑は今度は、ブリティス大佐を見た。

「この宇宙人は、どうする？」

能登島が腕組みをして言った。

「屋上に置いとけば、戦争中のどっちかが持っててくれるけど？ど
うする？」

歩美が首を振った。

「5回戦をやるつもり？」

「歩美。これだけ任務失敗したら普通クビだろう。大佐の敵が持つ
てけば、二度と会う事も無いだろうし」

「心配だな…。この人…生まれつきのヤラレ役みたい…また会いそ
う」

「警察に任せても、逃がすだけだ。能登島さん屋上に運びましょう」

屋上に上がると、ブリティス大佐が意識を取り戻した。

「殺さないと後悔するぞ！」

土畑は、空を見ながら言った。

「殺せば物事が解決するなんて、勘違いだ大佐。だからあんた達は、

宇宙戦艦をつくる技術を持ちながら戦争をやってるんだ」

「技術は戦争の産物だ」

「勘違いだ。日本は30年以上も戦争をしてない。にもかかわらず、技術はトップクラスにいる。暗殺でアメリカは良くなったとでも？」

「アメリカなど知らん。悪意には、正義で立ち向かうしかない」

「正義ねえ。国と国の間に正義なんて無い。有るのは、相手の社会の事を考えずに、やりすぎてしまった連中の後始末だ」

ブリテイス大佐はしばらく間を置いた。

「私は軍人だ。命令に従うのが本分である」

能登島が聞いた。

「ブリテイス大佐。貴官は本分だけで任務を全う出来ると考えるのか？」

ブリテイス大佐と能登島はにらみ合った。

「…っていうアニメのセリフを思い出す。全体の流れを把握しなければ、任務を果たす事など出来ないはずだ。なぜ、この能登島に勝てないか？敵を間違えているからです。銃を向ける相手をね」

「平和主義者の屁理屈に過ぎん」

「じゃあ。何度でもお相手しますよ。ねえ能登島さん。永遠に勝てない事を教えてあげます…行きましよう。どっちか知らないけど、お迎えが来たみたいなんで」

能登島が見ると、宇宙船が一機浮かんでいる。2人は屋上を離れた。階段を降りると、歩美に付き添われて中島が待っていた。

次話！

― 第12話エピソード

―第12話エピソード―

―第12話エピソード―

土畑も歩美も普段の生活に戻った。

1ヶ月、ゲームーズフロントは休業状態が続いている。中島は、今回の件に土畑 歩美 能登島が関係している事を隠し通していた。

一部の雑誌記者が3人の周辺を探っているものの確証をつかんでいない。

土畑は歩美と1ヶ月振りに行きつけのバーに顔を出した。

「あらゝもしかしてヨリが戻ったとか？」

ママが嬉しそうな顔で出迎えた。

「まあ不可抗力で」

土畑は歩美を見た。

「意義なし」

歩美は当然と云う顔をした。

「へえゝなんにしても良かったんじゃない？おめでと〜ございます
！」

「おおげさですよママ。とりあえずビールを下さいな！」

「オツケ〜乾杯しましょ！」

マスターも加わって乾杯した。

「ママ。なにかお祝い事ですか？」

先客の紳士が聞いてきた。

「別れた2人がやり直すんです。めでたいでしょ？」

「ほう、そりやあめでたい」

紳士はウイスキーのグラスを掲げて見せて、さらに言った。

「土畑晃さん。白石歩美さん。おめでとうございます！」

ママとマスターは不思議そうな顔をしたただけだったが、土畑と歩美は固まった。

「あら？お知り合い？」

「いえ。お会いするのは今夜が初めてです」

「でも名前を？」

「失礼しました。フリージャーナリストの山際厚と申します…」

山際は名刺を4枚だして配った。

「…実は。名古屋市で起こったゲームセンターのガス爆発事故を調べてまして…土畑さんが写っている事故現場の携帯写真を手に入れました。そもそもガス自体がゲームセンターに無かった点とですね…置物の人形だって云う2体のロボットが大きすぎる上に、客の若者がそんなものは店に無かったと言ってるんです。土畑さんはロボットを見てます？」

土畑は山際を見れなかった。思い出す振りでビールを飲んだ。

「どうでしょう？」

「その携帯写真。本当に僕なんですか？」

「ええ。これなんです…間違いないかと」

プリントアウトされた紙を山際はテーブルに広げた。最近の携帯は解像度がいい。3号機から半身を出している土畑がクッキリ写っている。

「似てますね。そっくりだ。でも、僕じゃありません」

「なるほど…他人の空似ですか？…この日現場にはおられなかった？」

「いつか知りませんが、これは僕じゃ有りません」

「そうですか。このゲームセンターの防犯カメラがですね…画像と音声をセンターに送って保存するタイプで…例の携帯写真を撮った若者がセンターのコンピューターに侵入して入手してまして…見られます?」

土畑は観念した。

「画像を見られたんですね?」

「と言うか…データ自体を託されました」

「なら…こちらの立場を理解されてるはずだと思いますが?」

山際は小さくうなずいた。

「…つまり。あれは本物の…」

「地球外文明です」

山際はしばらく黙った。

「危険過ぎますね?」

「取材した所で、載せられる新聞は無いと思います」

「ふん。ですが、今後の取材活動方針の参考に、聞かせて頂きますんか? 録音メモ無しで結構です」

「いや。僕と歩美…それから能登島秀彦が行方不明になったら公表して下さい」

山際はICレコーダーを内ポケットから出した。

―余話として

その1時間後。

土畑は逃げていた。ワゴンRの後ろには、能登島と歩美がシートにしがみついている。パトカーが停止命令を繰り返している。

正面からヘリが近づいてくる。対戦車ヘリだ。威嚇射撃をして来た。ドアミラーだけを吹き飛ばして見せた。

「能登島さん。裏技とかチートコードは？」
「無い。無いが前を見てアクセルを踏み込め！」
後部扉を開けた馬鹿でかい飛行体が前に降りて来た。
「あれは？味方？敵？」
「どつちでも同じよ！」
「じゃあ…多数決で…」
土畑は加速した。

その5ヶ月後。

土畑達は、宇宙人のコロニー連盟平和維持軍に居た。
コロニー間戦争を停戦に持ち込み和平交渉までこぎつけた。
地球上では、中島と山際が3人の帰還工作を進めている。
3人は英雄として帰還する事が内定している。

ゲームーズフロント完結

次話！

ーあとがき

―あとがき

―あとがき

完読して下さったあなたに感謝します。ゲーマーは諸悪の根源か？と云う主題でした。歩美と土畑で延々と議論させるつもりでした。しかし、この夏の暑さと湿度で、この際ブリティス大佐に言いにくい事を、はっきり言わせよう…。それで土畑も思いつき反論すれば早いじゃないかと云う結論に達しました。宇宙人が出てくる事で、ご不満の読者さんもみえると思いますがご容赦下さい。終わりは夢っぽくしました。不条理感を出したつもりです。

二次創作を書くと言う事で、武上溪を続けて読んで下さっている読者さんには、反対の方もみえると思います。月刊武上の中で肯定論を展開しています。よろしければ反論をお寄せ下さい。

次作は、高宮愛の最後の恋を描いてゆきます。その後のタイフーンアイを舞台に展開されます。気長にお待ち下さい。

2010年9月

武上溪

Ⅰ別8話サイバネテック アタック(前書き)

第7話から接続するⅠ別8話です。前半はⅠ8話と同じ物です。後半から展開を変える為の前置きとなっています。実質展開が変わるのはⅠ別9話からとなる予定です。

―別8話サイバネテック アタック

―第別8話サイバネテック アタック

土畑は、能登島秀彦宛てにゲーミングマーズフロントが乗っ取られた事をメールした。30秒後に返信がきた。

： Massage

土畑さん。詳細を検索しながら、そちらに向かいます。そちらのGPS位置は確認済みです。20分で駐車場に到着予定です。白のキヤラバンです。

土畑と歩美は、スパゲティを平らげて駐車場で待った。ぴったりに20分で、白いワンボックスがサイゼリアの駐車場に入ってきた。

しかし、運転席にはガタイの良い外国人が座っている。

「能登島さんて、ハーフなんだね…」

「まさか…違うよ」

外国人は、助手席を開け、シートを起こした。

「ここからナカ、ハイル オーケー？」

歩美は外国人の顔を見てビククリしていたが、土畑が中に押し込んだ。

中は、両側テールすべて、電子機器で埋まっっていて、真ん中のスペースに能登島が居た。

「あのドライバー、元WRCのシュバルツ ピットマンでしょ！？
5連覇チャンピオンの…」

歩美が泡を飛ばさんばかりに能登島に言った。

「これはうれしい。WRCファンとしては、何よりの挨拶です」
土畑が割って入った。

「すいません。能登島さん。初めまして、土畑です。彼女は元カノの歩美です」

「よろしく。歩美さんも」
能登島が手を差し出したので、狭い車内で、腕をくねらせて握手を交わした。

「これはいったい何です？」

土畑は車内を見渡した。

「仕事部屋です。以前に自宅の仕事部屋が襲撃されたので、常に移動させる事になりました。独立して資金的にも余裕が出たので…。ピットマンとは、5年契約で働いてもらってます」

土畑は詳しい経過を説明した。能登島は表情を変えずに、PCのキーボードを叩いた。

「ゲームズフロントのマスターコンピューターにアクセスしてみ
たんですが…外部からのコントロール下に有りますね…」

「ブリティス大佐ですか？」

能登島はモニターを指差した。

「マスコンにコマンドを出しているのは…上空40kmかぁほぼ宇

宙ですね」

「つまり？」

「まず人類じゃなさそうですね……」

土畑は固まった。

「……見て下さい。上空40kmの発信元に侵入してみたんですが……コンピューター言語の変換やってますね。その先の言語は、ビルゲイツの権利に抵触しませんね。地球上のあらゆる権利にも……」

歩美が何気なく言った。

「能登島さんの世界じゃ良く有る事なんですか？」

「初めてです」

土畑は天井を仰いだ。

「まとめると、ブリティス大佐は本物の宇宙人で、何らかの目的で中島のゲーセンを占拠した？」

「少なくとも、地球上の組織や個人とは無関係です」

「シャドーに連絡しろとでも？」

「あゝテレビドラマ？謎の円盤UFOでしたっけ……サンダーバードのスタッフが撮った奴でしょ？あんなのが現実に有ったらもう排除してるでしょ。残念ながら、僕らでやるしかないですね」

「国家の組織とかは？」

「都市伝説で言われてる程予算は出てないですよ。領事館程度の規模のようです。……向こうの方が技術レベルは上です。と言う事は……」

歩美が言った。

「オペレーターが目的？」

「そう。ゲーマーと呼ばれる連中の勘と反射速度……」

「何に使うつもりだ？」

能登島はモニターを切り替えた。

「この無数の点ですが……ゲーマーズフロントの匡体と同期してます。拡大してみます……」

土畑と歩美が能登島の後ろから、顔を入れた。画面には、人型ロボットが光線銃を発射している画像が拡大された。

「マジかよ。悪夢ってのは…これはリアルタイム画像？能登島さん…」

「戦ってるようですね。これは生中継です」

「まてよ…」

一方的に撃たれて、両腕が吹き飛んだ人型ロボットの腹の部分が開いて、人が飛び出してきた。

「相手は、人が乗ってるじゃん。ゲームやってる子供に殺人させるのか！ブリティスの野郎！」

「ヒドイ…爆発したよ」

歩美がおびえた。

「待つて…冷静に対処しましょう。国際宇宙ステーションのロボット兵器を使わせてもらいましよう」

「国際宇宙ステーション？って、若田さんの？」

「まあ正確には、日本が実験棟きぼうで参加しているプロジェクトです。…表向きは」

「裏向きの話が？ある…」

「地球上の政府は、すべて宇宙人達の事を知ってるんです。国際宇宙ステーションは、対宇宙人空母です。モバイルスーツ型ロボット兵器のね」

「それを何で、能登島さんが知ってるんです？」

「僕がシステムとソフトウェアを設計しました。何に使用するかわからされずに…おかげで、204の不具合が出ました。そいつの変更作業の為に、調べた結果知りました。JAXAは守秘義務で教えられないの一点張りです…」

「で…そのロボット兵器の使用許可を能登島さんが持つてるんですね？」

「歩美さん。許可は持ってません」

土畑と歩美は黙った。

「ただ。不具合修正テストを現物でやってます。誰も文句を言っていないので…まあ壊さなければ問題ないでしょう」

土畑は慎重に聞いた。

「つまり。沈められなければ問題ない。沈められたら、地球上の政府をすべて…敵にするって事ですか？」

「賠償責任は生ずるでしょうね。後は機密に不許可で触れた罪で拘束されます」

「そのリスクを背負ってやれと？」

「ハードのスペック的には、ブリティス大佐の方が10%上回ります」

「嬉しいニュースだ。他には？」

「土畑志願兵のプレイヤーデータを加味すれば、我々の方が0.23%上回ります」

「それは、どのくらい有利なんです？」

「何に例えましょうか…そうですね、シャーに対するアムロの有利さくらいだと思います」

「ほとんど無いと云う意味ですか？」

「ブリティス大佐には、引き分けに持ち込むのが限界と云う意味です。我々は最高で勝利できます」

「最高でね…。嬉しくて死にそうだ」

能登島はコマンドを連続で打ち込んで、軽く流した。

「操作なんですが…キーボードでやれます？」

「反応が悪過ぎです。PSのコントローラーとか無いんですか？」

「無いですね。そうだ！。ピットマンがPSPを持っています。戦場の絆のソフトを使って、コントローラーにしましょう」

能登島はヘッドセットマイクでピットマンと交渉した。

「ネンポウノ10%UPデドウダ？」

「9だ」

「9.5」

「9.25」

「決まりだ。悪いけどどちらか、運転席までお願いします」

「私が行く!」

歩美が前に出て行った

「能登島さん。ゲーム機借りるくらいで年俵上げるって有りなんですか?」

「契約書になければね。残念ながら、PSPを契約に入れてませんでした」

歩美がPSPを持って戻ってきた。

「じゃあワイヤレスONで…システムを書き換えます」
「書き換えは契約書に?」

土畑は歩美からPSPを受け取って、パワーを入れながら言った。

「そうですね〜市販の物より性能50%アップですから、逆に料金をもらわないと合いません。年俵から引いておきます」

「まあピットマンにはお気の毒な話で…」

能登島は聞いていない。

「オーケー。ワイヤレス接続…戦場の絆を起動して下さい。」

PSPの画面は、すでに別物になっている。シャーと云うディスクの音がしばらく続いて消えた。

「システムの書き換えに30秒…コイツをDCinに差し込んで…」
能登島は、プラグのついた1cm四方の箱を土畑に渡した。土畑は電源プラグに差し込んで聞いた。

「これは?」

「発電機です。発電素子触媒を使った物で、12ボルトの電流を36ヶ月発電し続けます。これもJAXAの実験室の中の物です」

「能登島さん。大丈夫なんですか?さつきから悉く(ことごとく)」

「えっ?心配ありません。燃えたり爆発しなくなったバーシヨンデータから作りましたから…それから、これはGPS受信機をいじく

った物なんです。GPS衛星を受信できれば、どこに居ても遠隔操作を続けられます。マウントして下さい」

土畑はネジ留めでマウントした。

「じゃあ。ロボット兵器と接続します…」

PSPの画面には戦場の絆の戦闘画面が表示された。違うのは、リアルタイム画像で見下ろす地球と国際宇宙ステーションの一部が映っていた。

「ロボット兵器は宇宙空間に？」

「フックで固定されてます。まだ格納庫ユニットは、ソユーズ基地で部品の段階です。じゃあ、固定フックを解除します。少し動いてみましょう」

土畑は、ジョイスティックを上に入れた。宇宙ステーションの構造物が流れて行く。

「土畑さん。左の推進剤メーターに注意してください。ゲームと違って自動復帰しません。0%になったら漂流します」

「0%になりそうだったら？」

「宇宙ステーションのフックにターゲットを合わせて、ボタンで着艦シークエンスに入ります。推進剤10%が必要です」

土畑は宇宙ステーションから離れて、前後左右上下運動を試してみた。

「ステイックを戻すと停止しますね？。自動制動ですか？」

「そうです。姿勢制御は自動で行われます。止まる時にも推進剤が消費される事を覚えておいてください」

「武装は？」

「高圧縮プラズマブラスター30発。ただし2弾ワンセットで発射されるので、15発と認識して下さい」

「どうして2弾1組？」

「宇宙人のロボット兵器の装甲を貫通するには、同じ場所に2弾必

要と予測されるからです」

「予測？」

「つまり、宇宙人の装甲でテストが行われていない…と云う意味です」

「撃つて着弾してみてのお楽しみだと？」

「その通りです」

「じゃあ宇宙人の装甲がへの河童だった場合の対処は？」

「他に武装は有りません。接近格闘に持ち込んで下さい。右肩のシヨルダーアタックを当てられれば、衝撃波で内部を破壊出来ます。」

これは構造からテストによる確認は必要有りません」

「…プラズマ弾で牽制しつつ接近して、シヨルダーアタックの流れかあ。ビームセイバーとかは？」

「残念ながら…開発に成功してません。レーザーを使ったヒートホークが試作されましたが電源の問題で採用されてません。つまり小型原子炉を搭載しなければならぬので」

「ブリティッシュ作戦？。落ちてきたら原子爆弾じゃないですか？」

「原爆にはなりません。ただ深刻な放射能汚染を広範囲に引き起こすでしょう」

土畑は頭が痛くなってきた。

とにかく行くしか無い。

「で？。ブリティス大佐を沈めれば良いんですか？」

「作戦の目的は、匡体とロボット兵器の通信を遮断する事です。通信を中継している母船の通信施設を破壊します。母船を沈める火力は有りません。当然ブリティス大佐が防御してくるはずですよ。必要なら沈めます」

「了解した。じゃあ母船はどっちです？」

「180度回転して下さい」

土畑は、ジョイスティックを上に入れて、縦方向に一回転した。そこには…モニターに入り切らない母船が動いていた。

次話！

― 別9話 対艦戦闘につづく！

― 別別 9 話対艦戦闘

― 別第 9 話対艦戦闘

母船はデカかった。縦方向に数十 km、狭い横方向でも 5 km ぐらい有りそうだ。色は鈍色^{にひいろ}で、窓明かりが無ければ宇宙の漆黒に溶け込んで判らなくなる。

「通信施設の住所は？わかってます？」

「ルートは確定してます。画面の矢印に従って下さい。母船内部に侵入します」

赤い矢印が進行方向に向いている。

「敵は？」

「ブリティス大佐が急行してます。他は別のエリアで戦闘中で、会敵の可能性はゼロです」

土畑は画面の端を眺めた。

「ブリティス大佐はどの方向から？」

「モニターには入って来ません」

「でも急行中なんでしょ？」

「ええ。この車に向かって急行中です」
歩美が目を剥いた。

「それってヤバくないんですか？」

「歩美さん。ご心配なく。我々はこれから中央道の恵那山トンネルに入ります。ブリティス大佐のロボット兵器は、かがまないとトンネル内部を移動できません。かがんで歩行出来ない事が判明してま

す」

「でも、こつちの通信も切れるんじゃない？」

「切れても、矢印に沿って自動で移動します。土畑さんをトンネル内部の退避所で下ろします。作業抗に移動してもらって地上に出ましよう。地図をプリントアウトします」

壁に取り付けてあるPIXUSが音を立てて紙を吐き出した。土畑はロール紙を破って手に取った。

「地上に出たら？」

「出来るだけ早く、GPS衛星から逆探知して、拾いに行きます。生き延びて下さい」

土畑はため息をついた。

「他に選択肢は？」

「有りません。出来るだけブリティス大佐のデータを収集して、弱点を見つけます」

「じゃあ。歩美をよろしくお願いします」

「いや。移動手段として、作業抗内の電気自動車を利用して下さい。運転は歩美さんがするしか有りません」

「キーがないでしょ？」

「コイツを使ってください。鍵穴に差し込むだけです。10秒でジャストの形状に変形します」

T字がたのシリコン棒を土畑は受け取った。

「ヤバすぎるよ何もかも…」

土畑と歩美は、恵那山トンネル内部の退避所に降り立った。窪んだスペースの壁がスライドドアになっていて、作業員以外立ち入り禁止区域と書いて有る。土畑はドアの鍵穴にT字型シリコンを差しして10秒待った。見事にドアは解錠した。

重いスライドドアを開くと、本道より1回り小さいトンネルが現れ

た。

作業抗はまばらだが、物が見える明るさで照明が点いていた。作業車はスライドドアを開けた正面に有った。

「エナ山ってどこ？恵那峡ランドの方？」

歩美の声がトンネルに響く。

「中央道の名古屋から長野方面に向かう途中だな。詳しい住所は家に帰ってから調べるよ。トンネルの中は轍が凹んでて、バイクで走る時は真ん中の路面を走ると舗装したてみたいに走れるトンネルだ」

「最後のは、要らない情報だね。これで…」

歩美は作業車に右手を乗せた。

「…どっちに行くの？長野？名古屋？」

土畑は紙を見た。

「地図によると…2km長野方面に、真上に上がる螺旋階段があるらしい。作業車をそこから無人で走らせて…囿に使えと書いて有る」

「トンネル出たとこブリティス大佐が破壊してって事？」

「そこまで単純なら助かる。ドライブしよう」

作業車はマツタリする程遅かった。歩美の横顔を照明が照らしては暗くする。

「何考えてるの？」

歩美は前を向いたまま言った。

「俺達なんで別れたんだっけ？」

「そんな事が…つまらない話。お話ししましょうか？」

「覚えてるのか？」

「もちろん。長くなるから思い切って省くと…1作目バイオハザードのメモリーカードの方が、私より大事なあなたの価値観に失望したから」

「ああ…思い出した。クリアデータの入った奴だ。確か…通りかかったゴミ収集車の中に投げ込まれて成仏したんだっけ？」

「違うでしょ？取り出そうとして、あなたが成仏しそうになったんです」

「まあ若かったからな」

「変わってないでしょ今も」

土畑はPSPを持ち上げて笑った。

「見た目はな」

歩美も笑って、目にかかった髪を横に払った。

「でもなんとなく、分かってきた…土畑晃って人物が」

「長くなるなら、バツサリ省いて教えてくれよ。俺は何者だ？」

「汚れた英雄って言う角川映画を覚えてる？」

「草刈まさおの？」

歩美はうなずいた。

「金持ちのお嬢さまが言う…あなたは何者？」

土畑が言った

「アイム レーサー」

「レーサーって給油の時にしか帰って来ない人の事？」

歩美は土畑を見た。土畑も見返した。

「ピットクルーが居るから帰って来る義務が有る人の事さ」

「晃のピットになれば良かったって事？」

「歩美がピットクルーなら、戻らなきゃ男がスタルよ」

歩美は土畑のキスをよけずに受けた。

ポーンとしている歩美を放っとくように土畑は言った。

「お昼の愛の劇場はこの辺にしといて…歩美っ！飛び降りるぞっ！」

土畑は歩美の肩をつかんで引っぱり、マッタリ走る作業車から飛び降りた。

転がりながら土畑は歩美に覆いかぶさった。

ボンッ

と音がして、バラバラと何かが降ってきた。それがおさまったのを見計らって、土畑は歩美を促して、立ち上がった。

「手加減なしか…」

「いつたいなに？」

「ブリティス大佐のミサイルだ。ミサイルは、かがまなくて良いからな…」

10m先で作業車の運転台が吹き飛んでいた。

「歩美。行くぞ、螺旋階段だ」

破壊された作業車の先に鉄扉が見えた。

次話！

―別第10話 逃避行

―別第10話 逃避行

―別第10話 逃避行

2弾目を注意しながら、土煙は鉄扉に向かって這って行った。煙りが立ちこめていて視界は20m程しかない。そつと鍵穴にT字シリコン棒を差し込み10をカウントする。鉄扉を細目に開けて、歩美を手招きした。

中は照明が無かった。PSPの電源を入れて、モニターの明かりを懐中電灯代わりにする。螺旋階段は、先が見えないので永遠に続くように思えた。

それでも30分登り続けて、螺旋階段が無くなった。

「やっと終わり？」

「扉を開けたら、次が始まるんだろうな……」

「開けないと終わらないよ？」

「じゃあ行きますか」

扉を開けると、目が日差しにくらんだ。しばらく目が慣れるまで中で待つ。フェンスが有り、その向こうは山の中だった。辺りをうかがいながら外に出る。手に持っていたPSPがビーブ音を発した。

画面を見ると、母船内部に取り付いたようで、構造物に取り囲まれ

ている。

アクセス再開待機中

の文字が出ている。歩美がのぞき込んで思い出したように言った。

「そうだ！車から降りる時に、忘れてたってこれ…」

歩美はジャケットのポケットから白いイヤホンを取り出した。

「耳に入れると、レフトが骨伝導マイクになってるんだって」

「双方向通信かぁ。どこまで行くのかな、能登島テクノロジーは…」
土畑は、イヤホンを接続して耳に入れた。

「能登島さん？応答願います…」

ザツとノイズが入ったあと、画面に現れたのはデИБ大佐だった。

「詳細は聞いている。その前に、前回任務成功により3階級特進伍長に昇進した。おめでとう土畑伍長。よくやった！見事だ。褒めてやるぞ！」

「ありがとうございます。しかし、次の任務が進行中なんです」

「分かっている。能登島とは通信途絶している。間もなく回復する焦るな。今モビルスーツが待機中なのは、この先に銃座が設置されている為だ」

「じゃあ突破します」

「待て伍長。単独での突破はリスクが高い。予備の機体を能登島がすでに投入した。パイロットは、ゲームキャラクターが搭乗している」

「誰です？シャー大佐ですか？」

「残念ながら、シャー大佐は機体性能がMS-05より劣る機体には乗らないと云う理由で断られた。連邦軍のパイロットは、ホワイトベースの1件で拒否だ。他は扱いづらい連中ばかりだ。しかし喜べ伍長！特別に、キャスバル レム ダイクン様に搭乗をお願いした」

「大佐？それは…」

「キャスバル様は、土畑伍長を英雄であるとおっしゃっている。1才とは言え、基本操作データをリンクさせた所、シャー大佐よりも反応速度が早い。必ず助けとなる。ただし」

「ただし？」

「失礼のないようにせよ。ジオン ズム ダイクン様の御子息である！」

「もう一度だけシャー大佐に頼んでいただけませんか？」

「無理だ。すでに、キャスバル様は出撃されてそちらに向かっている。間もなく、通信可能範囲に入るはずだ。それまで待て。私からは以上だ。任務成功を祈る」

土畑は頭が痛くなった。よりによってキャスバル ダイクンとは…。

それほど待つまでもなく、ノイズを前触れに映像が入った。オリジナルのシャーセイラ編で見たキャスバル少年が映し出されて言った。
「タッチハタ伍長か？私はキャスバル レム ダイクンだ。会えて嬉しいぞー」

上から目線だが、設定からすればサイド3トップの後継者と、伍長の関係だ。

「こちらこそ、お会いできて光栄です。しかし、戦場にキャスバル様はそぐいませんが？」

「ホワイトベースを陥落させた英雄に、助けが要ると聞いた。どうやら私しか居ないようなので駆けつけた。不要だったか？」

「いや、不要では有りません。十分過ぎる戦力だと感謝します」

「その通りだ。このモバイルスーツとやらの操作に、私は適しているらしい。どうやらパイロットとしての才能が有るようだ。なんだ？その顔は…疑うのか？ならば見せてやるう」

画面をキャスバル機が通り過ぎて行く、土畑は慌てふためいて援護に入った。

角を回った先は、直線の廊下になっていた。廊下と言っても縦横40メートルぐらいあり、先は数百メートルは有る。

そこに二連装の銃座が両側に10基づつ並んでいた。

キャスバル機はその20基の砲身を引きつけながら、回避運動をしながら廊下を突進して行く。

土畑は、1番目左の銃座にシオルダーアタックを掛けつつ、10番目左と右に一発づつプラズマ弾を放った。

「命中！残弾13！」

10番目左右が破裂して煙りを上げた。煙りが銃座の照準に影響が有る事を願う…。

1番目左をシオルダーアタックが潰した事を画面のブレと音で確認しつつ、正面一番目右を撃つ。

「残弾12！撃破4！」

9番目右の砲身がこちらに向く。土畑は9から3まで右列に弾を撃ちこんで行く。破壊したかは確認せず右2にシオルダーアタックを掛ける。左肩を目標に向ける為にシステムは背中をさらした。そこを左2が狙って来る。背中越に撃つ…。

「間に合うか？」

しかし、撃つ前に左2は穴が開いた。キャスバル機が反転したようだ。シオルダーアタックが右2を潰した。

「残弾5！撃破13！」

左3をシオルダーアタックで潰す間に、キャスバル機が、左4から7までを撃ち抜いた。

「残弾5！撃破20！土畑機損傷無し」

「キャスバル機。残弾5 損傷無し…どうだ？私の操縦は？」

キャスバル少年は、この程度はあたりまえだと言う顔をしている。

「見事でした。出来れば、戦闘前にブリーフィングが必要かと？」
キャスバル少年はげんな顔をして見せた。

「土畑伍長？。そんなものは、お前に必要あるまい。この状況でや

る事は1つしかないではないか？

「キャスバル様は、むちやをされます」

「はつきり物を言う。気に入らんな…お前らしくない。ホワイトベ
ースのむちやに比べたら、大した事は無い。ただの固定銃座だ…ま
あいい。先を急ぐべきだ。いくぞツチハタ伍長！遅れるな！
どつちが援護だよ！と言いたいのをこらえて、土畑はキャスバル様
を追った。

土畑は不意に肩を叩かれて、右を見た。

隣に座っている歩美が前を指差している。

「ブリティス大佐か！」

「違う…車の音がする。こつちに上がって来るんじゃない？」

動く間もなく、回転灯を付けた作業車がフェンスの前に現れた。へ
ルメットが窓から出た。

「お前ら！そこで何やってる！立ち入り禁止だそこは」

耳に残っていたイヤホンから能登島の声が重なった。

「土畑さん。すぐにPSPの電源をOFFして下さい。ブリティス
大佐に位置を知られました。人目の有る場所に移動すれば助かりま
す」

「やってみます」

と答えて電源を切った。移動手段は、目の前の作業車しかない。作
業員は車から降りつつしゃべっている。

「不法侵入だお前ら。警察呼ぶか？すぐに出ろ！」

「すぐに警察に行きましょう。フェンスの入口を開けて下さい」

「なあにい？。別に無理矢理警察沙汰にしようってんじゃないんだ
よ。まてよ…ここ開けずにどつから入ったんだ？」

「螺旋階段からです」

土畑は、作業員の気を逸らしながらフェンスの入口の南京錠にシリ

コン棒を突っ込んだ。

「螺旋階段つて…鍵が開かねーだろー開いてる？開けたのか？」

「不可抗力で、勝手に…」

土畑は南京錠を外しかんぬきを引いて、入口を手前に開けた。

「おいおいおいおいおい…なんで開いちゃうかあ？」

「伏せて！」

作業員を押し倒して歩美と車の中になだれ込んだ。

ドンツ。

鈍い音がして、螺旋階段の小屋が吹き飛んだ。

「なんだあ？」

「逃げないと死にます！。車を出して！」

車中で3人がもみ合って、作業員が運転席に、土畑が助手席に、歩美が後ろに収まって、車は急発進した。

「なんだありやあ？」

作業員はルームミラーをチラチラのぞき込んでいた。

「……わあかった！トランスファーマーだな…」

土畑も宇宙人のロボット兵器が追ってくるのを直接見た。

「フォーマーでしょ！」

「何言つてんだ。息子と映画館行ったんだ。トランスファーマーに間違いないんだよ」

「はいはいファーマーですけど、カーブ！カーブ！」

作業員はドリフトでコーナーをクリアした。

「これでも30年前は、鈴鹿130R突っ込みの鬼松田と呼ばれたレーサーだ。トランスファーマーなんぞチギツてやるさあ！」

「街に出れば！人目を嫌うんです！」

「恥ずかしがり屋かあ？この先コブが有るけど、スピード落とせねえから飛ぶぞ！何かにつかまれ！」

車が上を向き、体がふわっと持ち上がった。そして
ズッシャーン

と地面に叩きつけられた。鼻の奥がきな臭くなる。

「見る！アクセル床まで踏んでるぞ！こんなの10年振りだぞ！」
土煙は、コブがミサイルで吹き飛んだのをルームミラーで見た。そして、交通量の多い舗装道路を前方に確認して、気を失った。

次話！

―別11話―JR中央線

―別第11話JR中央線

―別第11話JR中央線

…オイ、起きろ！大丈夫かあ？

遠くで誰か叫んでいる。ロボットに追っかけられる夢を見てた気がするが…目が開かない。待て…揺さぶるな…慌ても駄目だ…えっ！
「ここは？」

ヘルメットを被った作業員？

「駅前だ。助かったみたいだな…荷台の工具やら部品が溶けてやがる。危なかった」

土畑は、完全に目が覚めて後部座席を見た。ぐったりした歩美が視線を返してきた。

「無事か？」

「とりあえず、頭と手足は有るみたい」

土畑は外を見た。

「どこの駅前です？」

「JR中央線の中津川駅だ。電車で名古屋に出られる」

「車が溶けて、すいません」

「まあどう説明するのだが…なっちまったものは、見たまんま言うしかねえさ。それより、それ程名古屋行きの列車が有る時間帯じゃないから行った方がいいんじゃないか？」

「ありがとうございます。土畑と言います。彼女は白石です。突っ込みの鬼松田さん？でしたね？」
作業員は苦笑した。

「過去の栄光って奴さ。気を付けて行きな」

土畑と歩美は、ふらつきながら作業車を降りた。

「松田さん。あの走りは過去なんかじゃなかったですよ。レースならポールトゥファイニッシュです」

松田は笑いながら右手を振って、走り去った。

「でっ？どうするの？」

「ここは日が暮れたら人気が無くなる。名古屋に出よう」

土畑と歩美は駅舎に向かった。

ホームに人影はない。PSPの電源は入れられない。歩美は時間表を確かめていた。

「あと20分で普通が来るね」

夕闇が迫っている。土畑は星が光り始めた空を見上げた。

「宇宙でも戦争かあ。人は変わらないのかな…」

「バベルタワーだと思うな」

土畑は歩美を見た。

「神に近づこうとして人が建てた塔…神の怒りに触れて言葉をバラバラに変えられた。協力出来ない為に塔建設は失敗するか…それが？」

「どんなにテクノロジーで高みに登っても、人の気持ちは満たされない。だからゴールはそこに無い。テクノロジーのバベルタワーが残り、絶望した人々が放棄し崩れ去る」

「ネズミ講類似商法みたいだな」

歩美はアツと言って笑った。

「そうね〜国って、バベルタワーかも」

「人はどこから来て、どこに行くのか？。少なくとも、今世界が向かってる方向じゃない事は確かだと思う」

「世界はどこに？」

「アメリカンドリームをつかんで、自分をセレブと呼べと叫びながら、格好良く生きる事に向かってだな。ブルーハーツ風に云うなら…格好良く人の頭を踏みつけながらね」
歩美はフーンと言って不満そうだ。

「でも9・11テロで、ニューヨークの人は気づいたんだよね。自分達の街の繁栄は、アラブの人々の頭を踏みつけながら築かれてる事」

「歴史に学べなければ歴史は繰り返す。アメリカ植民地はイギリスに頭を踏みつけられて、独立戦争を挑んだ。アメリカは挑まれている。それに気づけなければ、敗れ去る。そう俺は思う」

駅のアナウンスが普通列車の到着を告げた。

車内は土畑と歩美だけだった。歩美は、車窓からブリティス大佐を見つめようと目を凝らしている。土畑は疲れを感じて目を閉じた。中島の事が気になるが、休息も必要だ。なんとか決着をつけなければ…日曜日は終わりにかけている。

列車は、スピードを落とした。目を開けるとホームに滑り込んで行く所だった。恵那の文字が見える。しばらく停車して、また走り始めた。車両間のドアが開いて、誰か入って来る。土畑は、青いヘルメットにガンダム風に云うならノーマルスーツの男を見て、歩美を通路に引っぱり出した。

「そのままが良い。座って話をしよう」

男は、良く通る声で言った。

「ブリティス大佐か？」

「いかにも。名前を覚えてもらえて光栄だ」

「殺すつもりか？」

「残念だが…ここでは難しい。交渉したい。簡単な取引だ。そのコントローラーを渡してもらおう。私は君達の安全を保証する…それで

全て丸くおさまる」

「ゲームズフロントから手を引け！」

「それは出来ない。我々は戦局を有利にしつつ有る。子供達はゲームを楽しみ、我々は勝利を得るのだ」

「そんな事を許せると思うのか？ゲームは人殺しの道具じゃない」
ブリティス大佐はのけぞって笑った。

「シューティングゲームは人殺しじゃないか？敵を射撃して破壊する行為を他の何だと云うつもりだ？」

「シューティングゲームをしたら、街に出て銃を撃つゲームはない。ゲームと本物の射撃は別物だぐらい知ってるはずだ。あんたは始めから人殺しの訓練を受けてるんだろう？それともゲームの延長で大佐をやってるのか？」

「シミュレーションは有効な訓練のひとつだ。実弾射撃には、もちろんかなわない事は認めよう。それで？コントローラーを渡すのか？私から逃げ続けるのか？決めてもらおう！」

「ツチハタ伍長をナメるな！ブリティス大佐：必ず俺が撃墜してやる」

ブリティス大佐はあきれた目をして、首を横に振った。

「あの産業用荷役ロボットでか？自分が言ってる事がわかってないようだ。田植え機で、フォーミュラーカーに勝ってやると言ってるんだぞ。田んぼじゃなく、サンマリノで」

「田植え機だろうが、俺が乗った物が勝つ！」

「良かろう。ツチハタ伍長。しかし、ゲームズフロントとの通信を妨害し途絶させた場合。間違いなく死んでもらう。覚悟しておけ！」

ちょうど列車は次の駅に停車して、ブリティス大佐は降りて行った。土煙は椅子に倒れ込むように座った。

「ヤバすぎだ」

「何か考えないと、ヤラレちゃうね……」

「そうだな：人生がゲームオーバーになる」

土畑は、PSPを握りしめて体の震えを止めた。

―次話！

―別第12話通信施設エリアにシャーを撃て

―別第12話通信施設エリアにシャーを撃て！

―別第12話通信施設エリアにシャーを撃て

土畑と歩美は、名古屋駅の改札を出ると桜通口側に向かった。高島屋の前を通り過ぎて、エスカレーターを上り外のテラスに出た。空が見えて衛星を補足でき人通りも有る。土畑はコンクリート柵に両肘を乗せて、PSPの電源を入れた。すぐにイヤホンに声が入った。

―土畑さん！無事ですか？…そこなら安全ですね―

―色々有りましたけど、宇宙の方じゃキャスバルダイクンが来て大変です―

―こっちも、結構カーチエイスが有りましてね。ゲームキャラクタ―の方に聞われなかつたんです。キャスバルはかなり深層部まで侵入しました。土畑さんのロボット兵器にはララアを乗せたようです―

―12才でも、女性の好みは同じですか…―

―まあそれはともかく、通信施設エリアのゲート前でストップを掛けました―

―問題が？―

―シャーアズナブルのキャラクターが宇宙人側の兵器に走りました。用心すべきでした―

―じゃあ…通信施設エリア内にシャーのモバイルスーツが？―

―修理中のモバイルスーツでしょうね…足が無いんですが、戦闘能力には関係なさそうです。ビーム系のライフルがメイン武装です。当たれば貫通します。格闘性能は、こちらより上です。弱点は、背中
のランドセルです。排熱ダクトを塞ぐか潰せばオーバーヒートして

止められると推測されますー

土畑は眉をひそめた。

「シャーの射撃をかわしてですか？」

「こちらは2機です。シャーは2箇所同時には撃てません。こちらのプラズマ弾ならダクトを熔解させられます。当てて下さいー

「キャスバルは降ろせるんですか？」

「すでにララア共々降ろしました。アムロ レイが乗ってくれるようですよー

「…僕は嫌われてるんじゃないんですか？」

「シャーはオレが止めるそうですー

「なるほど。じゃあ組みますか…」

「では、1号機にツチハタ伍長を繋ぎますー

PSPの画面が開いて、鉄の扉が現れた。右上にアムロがカットインしてくる。

「ツチハタ伍長。あなたを好きにはなれませんが、シャーを止めるには協力するしか有りません。僕が陽動を掛けます。何とか背中を向けさせますから、排熱ダクトを狙撃して下さいー

「了解した。シャーは迂闊な事はしないはずだが、ゼロでは無い事に賭けましょう」

「ツチハタ伍長。シャーが迂闊になる確率はゼロです。これは詰めの将棋です。詰んで見せます。詰んだ瞬間に排熱ダクトに命中させなければ負けますー

「当てますよ必ず」

「じゃあアムロ行きますー

鉄のゲートが上下に開いた。土畑は殺気を感じて後退をかけた。その上をアムロが飛び出して行く。土畑が居た場所にビームが着弾して爆発した。

通信施設エリアは、四角い構造物が並んでいる500m四方の部屋だった。その構造物から太いケーブル1本が天井に伸びている。アムロは上手く、構造物の影に回り込んだ。シャーの位置はわからない

い。

アムロとシャアの姿がカットインされる。

「シャー！なぜ宇宙人のモビルスーツに乗っている！」

「アムロくん。宇宙人側につけば君が出てくると読んだからだ」

「なに？そんな事で能登島さんを裏切るのか！」

「裏切りではない。私は君と決着をつけるだけだ。ツチハタ伍長とも」

「それが裏切りだと言っている！」

言いながら2人は、激しく位置取り争いをしている。

「シャー！能登島さんの指示に従え！」

「残念だが、それは出来ない。劣る者は優れた者に従うしかないのだよ」

「宇宙人達が優れているのなら、何故地球人の子供達を使う！」

「原始的な反射スピードが速いだけの話だ。私のモビルスーツの性能は明らかに君のモビルスーツを上回っている」

「シャー！モビルスーツの性能の差が全てでは無いと言ったのを忘れたか！」

「それはわずかな差の時の話だよアムロくん。残念ながら今回は差が有り過ぎるようだ。あきらめる事だな！」

土畑は、ゲートになかなか近づけない。シャアは機先を制するようビームを撃ち込んでくる。まるで土畑が出る操作を見ているようだ……。

「そうかつ！なら……」

土畑は残弾数5の表示を見た。ララアはさすがにニュータイプだ。弾を使わずに残しておいてくれた。土畑は機体を回して、ゲートに背をむけた。ボタンをヒットすると同時に、機体をゲートに向けた。プラズマ弾の反動で機体はゲートに向かって突撃を始めた。シャアの射撃は無い。

通信施設エリアに入った。アムロがシャアを追い込んでいるが、シ

ヤーは巧みにかわしている。土畑は惰性移動を続けて、コントロールに触れない。アムロが土畑に気づいた。コンマ数秒後にシャーも気づいたが遅かった。アムロはシャーに機体を組み付かせて、バーニアを全開させる。シャーがうめいた。

「なにっ！させるかっ！」

シャーはアムロのバーニアをマニピレーターで塞ぐ。背中が向きかけたシャーの機体が戻る。しかしシャーは気づいた。

「しまった！」

土畑は塞いでいない脚部の断面に向かって、プラズマ弾を2発発射した。そこに装甲はない。光の塊は左右の脚部に吸い込まれて消えた。シャーの機体は力が抜けたように、弛緩する。アムロはそれを見逃さず後退を掛ける。頭部と両腕が付け根から吹き飛ぶ。その頭部パーツがケーブルに向かって飛んだ。ケーブルに頭部アンテナが突き刺さって貫通する。

土畑は残弾全てを突き刺さった頭部に送り出した。頭部が破裂すると、突き刺さっていた部分も一緒に無くなった。

「ツチハタ伍長。見事です。でも、シャーは破裂寸前に回収されたようです。また別の機体で出てきます」

「でしようね…でもシャーはあのタイプのミスは犯さない…能登島さん。バグですね。これが終わったら直して下さい」

能登島の笑い声が流れた。

「ゲームーは貪欲ですね。自分の命より設定リアリティが上ですか？」

「能登島さん。ゲームで死ぬゲームーは居ません。これはゲームじゃない。戦争です」

「まあとりあえず。通信は遮断しました。ブリティス大佐がどう出るかですね」

「怒り狂ってるでしょうね」

土畑は夜空を見上げた。

「機体は、推進剤がリミットです。アムロとハサウエイ ノアが国際宇宙ステーションに戻してくれます。土畑さんも今夜の安全を確保して下さい。こっちは安全とは言えませんので。申し訳ない」

「明日会社なんだけど、出勤するまでですね。何か考えます」

「幸運を祈ります」

「能登島さんとピットマンにも」

「では、また連絡して下さい」

土畑はPSPを切った。

「歩美。今夜家に帰ったら、大佐に家ごと焼かれる。お互い明日仕事だし、寝ない訳にいかない」「うん……」

「地下鉄でブリティス大佐をまいて、ラブホで一晩過ごそう」

歩美は、上目で土畑を見ながら首を小さく縦に動かした。

「他に代案があるか？」

「ないけど……恥ずかしい」

「俺もだ。ガマンしてくれ」

「次話！

「別第13話ブリティス アンド シャーズ カウンターアタック

―別第13話ブリティス アンド シャーズ カウンターアタック

―別第13話ブリティス アンド シャーズ カウンターアタック

翌日夕方。ゲーマーズフロント。

中島は、縛られて筐体の椅子に座らされていた。前にブリティス大佐が腕を組んで立っている。

「君の友人には失望させられた。あれだけ警告したにもかかわらず母艦に突入し、内部を破壊した。500名を超える乗組員が重軽傷を負った。キャスバルだのラレアだの…もはや放置できない。さらにだ。通信途絶したモビルスーツ100機が回収出来ずにる獲された。母艦は追撃を受けている。中島社長…貴様を囚にツチハタ伍長をおびき寄せる。電話を掛けるから、ツチハタ伍長に救助を要請しろ…」

中島は、ヒビの入ったオークレーの奥で不敵な笑いを浮かべた。

「…いいのか？オレの居場所を土畑に教えて？。後悔する事になるぞ」

「しよせんは、テレビゲームが得意なだけの男だ。生身の戦闘に耐えられる訳がない。ましてや、この国では銃の所持も出来ない。道端の草をむしるよりたやすい」

「呼んでやるよ。電話を掛ける」

土畑は仕事を終えて、会社を出た。能登島のワンボックスが計ったように現れて、土畑はピットマンに座席を上げてもらった。

能登島は、別れた時と同じようにモニターに向かっている。

「能登島さん。寝てないんですか？」

「3時間くらい仮眠しました。歩美さんを拾いに向かいます」

土畑の携帯がバイブした。

「土畑です…中島？無事か？今どこだ…フン…ナンだって！ブリティイス大佐が目の前に居るだあ…わかった助けに行くさ！。ブリティイス大佐に言ってくれ、テクノロジーが万能だなんて自惚れるんじゃないねえってな！」

土畑は、電話を切ると顔の前で携帯を握りしめた。

「中島社長はドコです」

「ゲームーズフロント。11階」

「なるほど…ブリティイス大佐は軍人に向いてない。11階は我々のホームだ。仕掛けのし放題だ」

能登島は、ゲームーズフロントのメニューをモニターに開いた。

まず11階室内のカメラ画像が出た。土畑はブリティイス大佐を背後から確認した。

「社長は筐体の中ですね。扉を閉じて、中島社長の安全を確保しましょう。後は、ブリティイス大佐の敵に頼みます」

「敵？」

「そうです…」

能登島がエンターキーをヒットすると、画像の中で筐体の扉が閉じた。ブリティイス大佐は、弾かれたように階段の入口に消えた。

「さすがに階段の扉は開けてありましたね。閉めてあればロックできたんですが…」

「どうやって11階に？」

「地下のバイク置き場から侵入しましょう。正面からは、マキナ大尉のモバイルアーマーに行ってもらいいます」

「マキナ大尉？」

「ブリティス大佐と戦ってる軍人さんです。ツチハタ伍長には最大の支援をしたいとの事です。キャスバルとララアがやりすぎたようです。母艦は中破してブリティス大佐側は、事実上敗走状態になったみたいです」

「じゃあ急ぎましょう!」

「その前に歩美さんを確保します」

その頃。歩美は勤め先の会社の駐車場に立って居た。夕焼けの空を警戒して見上げている。

社長が不審に思っ近づいてきた。しまった!と思ったが遅かった。

「白石くん。何を見てる?」

「いや…あの夕焼けを…」

社長は後ろを振り返った。

「夕焼けはこつちだろう?」

「いえ…実はユーフォーがあそこに居たんです」

歩美は適当に夕空を指差した。

「どこどこ…ホントだ!」

驚いて歩美も指先を見た。しかし、歩美は必死で車に飛び込んだ。

「社長!伏せて!逃げて!」

言い捨てて、エンジンを掛けるとアクセルをベタ踏みした。小さいが明らかに、形はロボットだった。ブリティス大佐に違いない。

「能登島さん早く来て!」

一方能登島のモニターに、ブリティス大佐とは違うデザインのノーマルスーツが表示された。

「マキナ大尉です。ブリティス大佐のシグナルを再補足しました。」

何か車両を追っているようです。そちらの仲間では？画像を転送します―

少し画像の粗い空撮動画に、歩美のワゴンRの暴走が見えた。すぐ後ろにロボット兵器が飛んでいる。

「くそつやられる！何とかしてくれ！」

土畑はモニターにツバを飛ばした。

「ツチハタ伍長。私に任せろ！」

マキナ大尉の声が響くと、動画のロボット兵器は回避運動を始めた。しかし土畑は、広い直線の広域農道の先が行き止まりになっているのを見た。

「歩美！スピードを落とせ！死ぬぞっ！」

能登島も啞然とした。

「駄目だ！気づいてない」

ワゴンRは40m手前でブレーキの白煙を上げたが止まらない。行き止まりのガードレールの寸前：画面の外からロボット兵器が舞い降りて、ワゴンRと重なった。通り過ぎる…ガードレールにぶつかった車は見えない。

「拾い上げた？」

「すげー奇跡だ…」

「ツチハタ伍長。無事救出した。そちらに向かう」

土畑は、ヘナヘナと床に座り込んだ。

「土畑さん！まだです…マキナ大尉後ろに追尾^{つかれ}てる。車を離さない
と撃墜^{うちお}ますよ！」

「このスピードで落とせないっ！」

「マキナ大尉！操縦桿から手を離して！アムロレイ人格データを入れます」

「何だって？」

画像のマキナ機は、弾道を知っているかのように、被弾をかわし始

めた。

「何だこれは！信じられないマニユーバだ！ー」

「マキナ大尉！ペダルにも触れないで下さい。人格データモードが解除されてしまいます」

「わかった！おう反撃するぞ！ー」

マキナ機はワゴンRを抱えたまま反転して、1連射を放った。ブリティス機の左マニユーピレーターの指を吹き飛ばした。ブリティス機はマキナ機の後ろから外れてゆく。しかし、もう1機がマキナ機の後ろに入ってきた。

「アムロくん。通信施設エリアの借りを返させてもらおう！ー」

「なにっシャーか？」

能登島と土畑はハモった。

「アムロくん。まず抱えている物を降ろしたまえ。フェアでなければ意味がない！ー」

「シャー！くだらないプライドで武を汚すな！ー」

「何？くだらないだと？名誉こそがすべてだ！恥はそそがねばならんのだよ！ー」

マキナ機は減速して駐車場にワゴンRを置いた。そこから急上昇を掛ける。

「シャー！宇宙そふに行くぞ！ー」

「良かるう。望む所だ！ー」

能登島は、土畑を見た。

「土畑さん。こっちは歩美さんを回収しましょうっ…ピットマン！ナビに従ってください！」

能登島の車を降りて、ワゴンRに走った。ドアを開けると、土畑の腕に歩美が倒れ込んできた。

「フミ！フミ！」

土畑が呼び掛けている後ろに、ドンツという音が降ってきた。振り返ると、左マニユピレーターから煙りを上げているモビルスーツが不気味に沈黙していた…。

―次話！

―別第14話白兵戦

―別第14話白兵戦

―別第14話白兵戦

土畑は、左マニユピレーターだけではなく、数ヶ所から煙りが洩れているのに気づいた。

音もなく胴体のハッチが開いた。煙りと共にブリティス大佐がゆっくりと出てきた。手には、土畑の知らないテクノロジーの拳銃が握られている。ブリティス大佐はケガを負っているように見える。土畑は柘植さんのサバイバルバイブルに書いてあった文章を思い出していた：銃を持っている方向に回避運動をする。なぜなら、脇が開いて狙いが甘くなるから：しかし、よろけながらブリティス大佐は撃たない。

「何もかも滅茶苦茶にしゃがって：ツチハタ伍長……てめえなんぞは1発で充分だ」

「やめておけ。戦争に勝者などいない。家族を知り合いを、失った人々を生み出すだけだ。負けた方も勝った方も人にとって、一番大切な物を失う。シューティングはテレビゲームの外でやってはいけないんだ。そんな物を人に向けるんじゃない」

「なんだと：貴様は何をした？ヒルドルフ号乗組員500名にケガを負わせ、地球圏での戦線を崩壊させた！貴様に綺麗事を言わせはせんぞ！」

「勝手にゲームセンターの子供達を利用した報いだ。自業自得だろ！」

ブッ。

光の塊が上に逸れて、車の天井を溶かした。よろけているせいで、狙いが定まらない。

「撃つたな！」

「撃つたとも！次は当ててやる！」

土畑は歩美をそつと、シートに降ろして立ち上がった。

「丸腰で何を威張り腐ってる？。宇宙で暮らせるテクノロジも無い猿が！」

土畑はブリティス大佐と間合いを詰めた。

「戦争をしなきゃあどうにもならないレベルの猿に言われたくないな！」

土畑はブリティス大佐の顔に向かって、右ストレートを叩き出した。パイザーの開いたヘルメットの鼻を直撃する。ブリティス大佐はのけぞって、後ろに倒れた。

「テクノロジなんてモノより、こんな拳の方が信頼性は高い。あんたは、根本的に間違ってる」

そこにピットマンが降りてきた。

「ダメと思いましたよ！スイマセン。何もできなくて」

「気にしなくて大丈夫です。それより歩美を！」

「応急措置を知ってます。フミさんワタシ見ます」

ピットマンは、車の中の歩美に駆け寄った。

その2人は、周囲に影が落ちるのに気づいた。見上げると、ガウ攻撃空母に似た物が浮かんでいる。さらに、何本もロープが落ちてきて、武装した兵士が降りてくる。

「なんだ！」

降りてきた兵士は、土畑とピットマンの周りに、半透明な膜を発生させた。

「ツチハタ伍長殿！。ヘンメ上等兵であります。お会いできて光栄です！これより護衛させていただきます！。ヒルドルフ攻撃、見事でありました！」

土畑は溜め息をついた。

「最後の言葉は、俺じゃなくキャスバルとラリアに伝えとくよ」

ヘンメ上等兵は、意味が良く分からなかったらしくハアと答えた。

「間もなく、モリ軍医殿が降りてこられます。そちらの方の治療をさせていただきます！」

ピットマンが振り返った。

「マズイ。呼吸が途切れがちだ。ミヤクも弱い」

「くそつ。歩美しつかりしろ」

モリ軍医は、丸顔のスキンヘッドだった。小型テレビのような物を歩美の上にかざした。

「急激なGがかかったせいで、内臓が損傷している…肋骨と脊髄に5ヶ所の骨折」

「なんて事だ。何とかして下さい！」

モリ軍医は土畑を見て笑った。

「あなた方の医療では、数時間で死亡だが…我々には軽傷だ。医療ポッドに入れて20分あれば、完治する。用意しろ！ここに降ろせ！」

すぐに日焼けマシンのようなカプセルが降ろされてきた。

モリ軍医と衛生兵が歩美を医療ポッドに入れた。

「これで良い。がっ、奴らがそろそろ来る頃だ」

モリ軍医は暗くなった空を見た。

「奴ら？」

「ブリティス大佐を回収にやって来る。結構手強いぞ…」

ワゴンRを中心に、100名が防御陣を敷いていた。上空には、ガウ攻撃空母風が浮かんでいる。

ブリティス大佐の回収部隊は、小ムサイ風の母船で現れ兵士を落と

してきた。

両者とも、半透明な膜でエネルギー弾を弾き返しながら撃ち合いを始めた。上空ではガウと小ムサイも撃ち合っている。やがて、両者が接近して1m：半透明の膜を境ににらみ合いになった。ヘンメ上等兵が土畑の横で言った。

「格闘になります。白兵戦です。私の後ろに居て下さい。離れたら死にますよ」

「ピットマンと歩美は？能登島さんは？」

「それぞれ担当が決められています。我々を信用して下さい。ウチの部隊は最高の連中が揃っています。英雄を死なせはしません」

土畑は恐怖した。ここは最前線で、目の前にプロの敵が見える。ゲームオーバーは無い。即、死が有るのみだ。アドレナリンが放出され、頭の中が白くなる。股間に生暖かい液体が広がった。何とか、歩美の医療ポッドを守らなければならないが：自分を守る術も無い。願える物すべてに祈った。

助けてくれ！

と…。

永遠のような数秒が過ぎた。

「なぜ…動かない？」

兵士達は白兵戦を始めなかった。小ムサイが降下して、倒れているブリテイス大佐を引きずって、中に敵兵士達が運んでゆく。こちら側は見ているだけで動かない。小ムサイは飛び去った。

「フウツ。終わりましたね」

「ヘンメ上等兵。どうなっただんです…」

「無線によると…5分前に、講和条約のプロセスに入る為に、休戦が合意されました…同時に、ツチハタ伍長の命と引き換えに、ブリテイス大佐の回収も合意されたと…言う事です。良かったです。戦争は終わります。ツチハタ伍長殿の活躍の結果です…ありがとうこ

「ごいます！」

土畑は体中から力が抜けて、放心状態になった。次々と兵士が握手を求めてくるのを、機械的に握り返した。

「次話！」

「別第15話余韻」

―別第15話余韻

―別第15話余韻

20分後に歩美は、医療ポッドから出されて意識を取り戻した。宇宙人達は、車の天井に開いた穴を綺麗にふさいで去った。

「終わったの？」

歩美はまだ寝ぼけまなこだった。

「サアな…アムロとシャーはまだやってるらしい」

「中島さんは？」

「電話で話した。無事だそうだ。占拠してた連中も消えた」

「ブリテイス大佐は？」

「ノックアウトした。また来るかもしれないけど、宇宙人どおしの取引で命は保証されてるはずだ」

「終わったって事？全部？」

「これだけの騒ぎが、すんなり終わるのも…どうかと思うけどな」

「能登島さんは？」

歩美は能登島のワンボックスを見た。

「色々処理が有るらしい。一番でかい問題は、宇宙人のシステムに流れたシャーアズナブルの人格データらしい。宇宙人の兵器の間を動き回られたら、回収不可能だそうだ」

「つまり、アムロレイと決着つけるまでって事？」

「能登島さんは、ラレアを送り込むらしい。アムロなら止めると思うけど…とりあえず家に帰ろう」

「うん…。助けてくれてありがとう」

「俺がゲーム馬鹿で良かっただろ？」

「それは…」

「それは？」

「…微妙だけど。ガンダムって少し興味が湧いた。アニメ見てみようかな？」

「それなら、オリジンのコミックを貸すよ。その方が理解しやすい。まず、ジオニズムとコントリズムについて…」

歩美は笑いながら、土畑のマニアトークを聞き流した。視線の先には、2つの光が動き回っている。

私の彼は、ゲーム馬鹿じゃない。ツチハタ伍長で英雄だと…歩美は秘かに思った。

― 次話！

― 別第16話余話

―別第16話余話1

―別第16話余話1

あれから数日後。

ゲームズフロント11階に、土畑と歩美は中島に呼ばれた。

「あのゲームの完全版が出来たって？」

そう言う土畑に、中島は新品のオークレーを人差し指で上げて言った。

「ゲームタイトルはゲルググ コックピットになった。シナリオはホワイトベース強襲の他に、通信施設エリア破壊任務…これは回収したシャーのデータとの死闘だ。ドックファイトVSブリティス大佐は、新キャラクターだぜ！」

土畑は苦笑いをもらした。

「勘弁してくれよ。ブリティス大佐は…。シャーは回収出来たんだな？」

「ラアラが説得したらしい。ラアラがそう言うなら…の一言が出るまで、能登島さん2晩徹夜だった」

土畑は首を振って、能登島の苦勞をねぎらった。

「それで？アキラはどのシナリオをプレイするの？」

歩美は、笑いながら土畑に言った。

「とりあえず… ホワイトベース強襲がどうなったか見てみようかな…」

中島は、キーボードをヒットして筐体の入口を開けた。

「オーケ… ホワイトベース強襲ね… デイブ大佐がお待ちかねだ」

再び天井が開いて、ザンジバルに跳躍した。

「現実な戦闘にならないっていうのは、これほど容易たやすいものか……」

しかし、土畑が操作している事は何の変わりもない。ゲルググ高機動型は、発着デッキに飛び込んだ。モニターに、デИБ大佐が満面の笑みで現れた。

「よく戻った！前回の任務の功績により3階級特進少尉に昇進したおめでとう！土畑少尉。ただし、戦地任官少尉扱いとなる。早急にメニューから士官学校を選択し、士官候補生として戻る義務が有る。この任務終了しだい義務を果たすように。質問は？」

「いままでと変わる事は？」

「少隊の指揮が可能になる。君の下に軍曹が付き直接指揮出来る。

戦闘中にも私を介さず作戦変更可能だ。これからは、任務説明だけ私が行う。あとの設定は、軍曹に指示せよ」

モニターに指示の文字が出た。

「これより、ルナツを発して、ムーア経由ルートでソロモンに向かっている木馬を攻撃し獲得する。装備その他は、軍曹に指示。迅速に準備し出撃せよ！」

デИБ大佐は消えた。

土畑はメニュー欄、士官学校の上の指示を選択した。

モニターに、がっしりした下士官が出た。

「土畑少尉でありますか！カリウス オットー軍曹であります。

ヒルドルフ攻撃は見事でした。ガトー大尉でもあそこまで迅速には行かないでしょう！」

土畑は首を振った。

「みんな勘違いしている。最初と最後は、確かに俺だが、真ん中は別のがやった」

「素晴らしい！僚機に手柄を譲るなど、ブレニフ オグス中佐を思わせます……少尉は我々の誇りです！」

「……。過去の記憶はそこまでしてくれ。前に向こう軍曹」

土畑は少々疲れを感じた。

「了解。どうやって、木馬を料理されます？」

「高機動中のイジェクションはどうなっている？」

「変更が行われました。ノーマルスーツでの制御は事実上不能です」

「前回のプレイヤーはリセットされているのか？」

「いえ。木馬のクルーは前回の恥辱をしっかりと覚えていてと思います」

カリウス軍曹は楽しそうな顔になった。

「なら…奇襲は通じない…正面から行くか…」

「それが、状況は流動的です。あくまでウワサレベルの情報ですが、シャー少佐がムーア宙域に居るらしいと…」

「アムロにからんでくれればか？。そんな話を元に作戦は立てられない…どうするかな…」

土畑はモニターをぐるりと見回した。

「あれは？」

オニギリ型の物がデッキに10基壁際に並んでいる。

「救難ボートですが？」

「推進力は有るのか？」

「艦の爆発によって、破壊されない程度の装甲と停止できるだけのバーニアは装備されています」

土畑は救難ボートを見ながら腕を組んだ。

能登島は、やっとゲームーズフロントから解放されて本業の仕事に戻っていた。

画面の端にゲルググのイラストが点滅した。

「ツチハタ少尉が出撃かぁ…ん？」

画面の反対側に、ハッキング警報が出た。反射的にクリックする。

「ゲルググゴックピットに？。発信元は…」
しばらく時間が掛かる。

「ゲームズフロントの屋上だあ…」
能登島は、宇宙人マキナ大尉の回線を焦って開いた。

歩美は、ノートパソコンのモニターで土畑と軍曹のやり取りを中島と見ていた。

ブシッ

音かしたので筐体を見た。変わった所は無い。視線を上によけると歩美は叫んだ。

「中島さん！またケーブルがあ！」

中島も数本の白いケーブルが天井を突き破り、筐体に刺さっているのを見た。

モニターの中では、土畑が軍曹に作戦指示をしている。中島は筐体の扉を開けようとして、キーを叩くと同時にマイクに叫んだ。

「土畑あ！逃げる！ブリティス大佐が戻って来たあ！」

筐体の扉は開かない。キーは効かなくなった。モニターの中では、土畑が何？と言う顔をしている。

バン

の後に天井のコンクリートが降ってきた。中島は歩美を机の下に引きずり込んだ。

ガラガラ バリバリ

が20秒続いて静かになった。
「どうなったの？」

中島と歩美は、おそろおそろの机の下から顔を上げた。

筐体のあった場所は土台だけで、ケーブルが引きちぎられている。天井を見上げると、青い空に真っ直ぐ白い雲が立ち上がっているのが見えた。

― 次話！

― 別第17話余話2

―別第17話余話2

―別第17話余話2

「カリウス軍曹。あれを使うぞ」

土畑はターゲットマークを動かした。

「救難ボートを？ですか？」

「ゲルググの破片に偽装する。…定員は3名だから4基要るな。アムロに気付かれないように、密集隊形の中に付属品ぼく入れ込む」

「ゲルググは無人で？」

「救難ボートから遠隔操作出来るか？」

「お待ち下さい照会します…可能です」

「救難ボートの偽装にどれくらい掛かる？」

「出撃までにはやらせます」

そうか…と言おうとした時
ドンツ

と筐体自体がゆれた。

バツアカアーン

耳がおかしくなる程の爆発音が炸裂した。

「カリウス軍曹！何だ！」

「発着デッキハッチに着弾！敵は不明…連邦ではありません。艦は対空砲火を開始。ブリッジは、ツチハタ小隊に出撃命令を発してます」

「小隊はどこだ！集合させろ！」

「待機室から発着デッキに向かっています！70秒で出られます！」
「遅い！ザンジバルが沈むぞ！我々2機だけで出る！発着デッキハッチを開ける！」

「ブリッジです。ハッチを開きます。ツチハタ少尉、開けた瞬間撃たれる可能性が有ります。回避して下さいー

「早く開ける！宇宙遊泳したいか！」

土畑は機をハッチに向けた。上下にゆっくり開いてゆく。ビームライフルの照準を、その隙間に合わせる。

「中島あ筐体自体が揺れるのはいいが…程がある。怪我するぞ。爆発音もデカすぎ」

中島の返答は無い。

「ツチハ……げろ……リ……ス……てきた……」

途切れ途切れの音がスピーカーから聞こえた。

「断線かあ？揺らし過ぎで壊れたんだろ」

ハッチの隙間に影が走った。土畑は脊髄反射でビームを回避しながら、牽制射撃を横に放った。後ろのゲルググが被弾した。

「せめて、5秒で開くようにしてくれ！発着デッキで全滅するぞ！」

土畑は、ゲルググがギリギリ通り抜けられる幅に開くと、発進させた。

「カリウス軍曹！続け！遅れるな！」

「少尉！続きます！」

土畑はロールしながら、ハッチを出た。360度全周囲モニターはグルグル回っている。

「おかしい…下向きにGが掛かっている。中が回るのか？」

土畑は、カリウス軍曹の位置を予測しながら敵を探した。

「そこだあ！」

土畑はロールしながら、ビームライフルを5連射した。一発が着弾して閃光を放った。機影が弛緩するのを確認して程なく爆発した。

「カリウス軍曹！あと何機だ？敵は？」

「2マンセルです。あと1機は逃走しました。追いますか？」

「いや。このまま直衛する。小隊を集合させる」
「やっ」と残りのゲルググが追いついてきた。

「遅いぞ！化粧でもしてきたか？ツチハタ小隊にニューハーフは必要ない。辞めてお店に帰れ！」

モニターに小隊11名の姿が並んだ。

「申し訳ありません。残念ながらお店は潰れました。この連中では、客が恐れをなしたようです」

土畑は笑った。それぞれの下に名前と階級が有る。

「クランプ曹長か…。敵に恐れられるのは重要だ。モバイルスーツ乗りとしては、役に立ちそうだな」

「期待に応えられるよう最善を尽くします！」

「いいだろう！。これからアムロ レイを罫に引っ掛けて、また木馬を頂く。ブライト艦長のケツをひっぱたきたいヤツはついて来い！」

「いつせいに」

「イエスサー！」

の合唱が筐体の中に響いた。

「よし！。発着デッキに戻って、準備を行う！」

ツチハタ少隊は、ゲルググの残骸に偽装した救難ボートに移った。定員3名少隊は11名なので、土畑はクランプ曹長と2名で移った。この時点でイジェクションモードになっている。

「よし、11機密集隊形で救難ボートを真ん中に入れ込む。カリウス軍曹！遠隔操作をオートで始める」

「イエスサー！」

無人のゲルググが動き出し、マニピレーターが偽装した救難ボート

トをつかんで行く。

「出撃準備完了まで…あと30秒」

「ブリッジ？木馬はまだ見つからんのか？」

「ブリッジです。観測ポッドが木馬を捕捉しました。木馬のブリッジ直撃ルートに入るまで20秒です」

「20秒後にツチハタ小隊11機全機出る！。発着デッキハッチを開けてくれ」

「了解。開けます」

「ツチハタ少尉。艦長のマルティン プロノホ中佐だ。ブライト艦長は同じミスは犯さない。苦しい作戦になるが朗報を期待している」
「詰め将棋は、詰めるように作ってあります。それはブライト艦長のミスではありません」

「理屈だな…ツチハタ小隊出撃！」

「行きます！」

ゲルググ11機と、偽装救難ボートはホワイトベースブリッジ直上へのルートに乗った。

「次話！」

「別第18話余話3」

―別第18話余話3

―別第18話余話3

能登島は、中島と歩美の横で穴の開いた天井を見上げていた。

「ちゃんと、周りをレーザーで切ってる。地球上には無い技術だ…
凄いい」

歩美が怒った。

「能登島さん！」

「歩美さん。マキナ大尉が捕捉してくれてます。筐体自体をシールド空間で囲んでいるらしい。殺すならしない。宇宙空間で筐体から空気が漏れて終わってるはずですよ」

中島も悄然として言った。

「ブリティス大佐は、何をするつもりだ…」

「マキナ大尉に言わせれば…自説を延々としゃべるのが好きらしい。多分、ブリティス美学を聞かされてるんじゃないかと思えます」

中島は天井を指差した。

「そんなもんは、メールで済ませろよ！迷惑だ！」

能登島は気の毒そうな顔をした。

「マキナ大尉サイドにとって、ツチハタ少尉は英雄です。全軍を拳で救出するでしょう。停戦協定違反の疑いもあります。殺してないので、微妙ですが」

「ひどいよ！こんなの！」

「歩美さん。落ち着きましょう。我々は、戦争に巻き込まれた。沈着冷静に敏速である事が生き残るコツです。マキナ大尉を信じまし

よう」

歩美はしゃがみこんで、顔を覆った。

土畑は、筐体の中で重力が無くなるのを感じた。シートベルトの中で体が浮いた。

「オイオイ？何で、浮くんだよ！いつの間に、反重力を開発したんだ！」

中島は返答して来ない。

「少尉。カリウス軍曹です。RX-78の射程圏まで40秒…初弾の着弾と同時に救難ボートを発進させます」

「ブーストは、短く…1秒で着弾に合わせる。どの方向かも合わせないと、バレる」

「了解」

クランプ曹長が話かけてきた。

「アムロ。レイは、普通に来ると、少尉殿はお考えですか？」

「ニュータイプの事は、オールドタイプの俺には判らん。始まれば、台本はあるがオールアドリブ劇になるかもしれん。それはそれで、楽しめるんじゃないか？」

「はい。その方が兵も喜びます」

「よし…クランプ曹長。白い悪魔がくるぞ…」

前回と様子は変わらないように見えた。同じ軌道で高速接近してくる。

「カリウス軍曹！小細工が無いか？番機陽動機動開始！」

「了解…」

最後尾の1機が離れて、前に出た。

「反応が無い…アムロ。レイもイジェクションモードの可能性有り」

「総員注意！」

クランプ曹長がモニターを拡大した。

「右脚部の出っ張りわずかに大きい！」

「いいぞクランプ曹長！全救難ポートブースト全開！RX-78は無敵だ！」

先頭のゲルググが開いて、救難ポートはジェットをほとばしらせて加速した。

直後に、RX-78が射撃を開始して先頭1番機が吹き飛んだ。

「木馬に取り付いたら、エアロックハッチ爆破をオレが行う！残り
はアムロ レイに備えろ！」

「了解！」

「クランプ曹長。ブリッジに偽爆弾を仕掛けて、クルーが見た瞬間
閃光弾で目を使えなくしろ」

「ブリッジのドアは？どうやって開きます？」

「前回、開き方を試しておいた。せつかくコンプリートの後も動け
るようになってたからな」

「先読みのツチハタ少尉ですか？」

「戦いが非情なのは、なにもシャーだけじゃない」

「あと5秒で制動噴射開始…………… ナウ！15秒で木馬艦体に接
舷します！」

「総員白兵戦用意！…うっ待て！」

土畑は、ゲルググの光点7番が残っているのに気づいた。

「RX-78のオートプログラムが7番機を討ち洩らした！7番機
の自爆コードを教える！」

「少尉殿！少尉殿と同時に入力しないと自爆しません！行きます！
「こい！」

「ヤラセハセンヤラセハセンゾー

7番機はホワイトベースブリッジまで500mで自爆した。窓に破
片が降り注いだが損傷は無い。

「危うくゲームオーバーだ…エアロックはどこだ？」

ツチハタはブリッジ構造物基部にある前回のエアロックをさがした。
「塞いだ？イヤ…継ぎ目を消したただけだ」

拡大したモニターにくすんでいない白い塗料が見分けられた。土畑はターゲットマークでロックした。

「突入地点をマークした。マーク地点を中心に展開！5 4 3
2 1 ナウ！」

土畑は爆薬2とサブマシンガンを確認かめて、救難ボートを出た。エアロックまで10m。味方を白い艦体に落ちる影で確認する。右上1m縦に、弾痕が塗料の煙りを上げたが、土畑は振り返らない。エアロックの継ぎ目に沿って、チューブ状の爆薬を貼ってゆく。味方が弾幕でアムロ レイを牽制するが、弾痕は50cmまで近づいてくる。

「ニュータイプは化け物か！これ以上近づけるな！」

カリウス軍曹の声が入る。味方は折り畳み式の盾でアムロ レイの銃撃をしのいでいる。が、アムロは10人の火線を避けつつ、銃撃を送り込んでいる。

土畑は設置を終えた。正確に継ぎ目に設置しなければ、エアロックは開かない。慎重に確認する。

弾痕は20cmまで来た。

「あと10秒保たせる！」

襟首のフックを誰かがつかんだ。グイツと引っ張られる。顔の5cm横に白い煙りが上がった。

「よし。爆破！」

土畑はチューブの先をチギリとった。
バンッ

と云う音の後、エアロックの扉が浮いた。土畑が扉をどけた隙間に、カリウス軍曹が手留弾を入れ込む。周りは、盾の壁で囲まれていた。3秒待つて、土畑がカリウス軍曹を抑えて内部に飛び込んだ。続いてカリウス軍曹が入ったが、前に体を入れ込んだ。

「やめて下さい！指揮官がする事ではありません！」

土畑は、サブマシンガンを内部ドアに向けながら笑った。

「隠し通路はおそらく使えない。だとしたらブリッジまでフロアを上がらなければならぬ。それには、兵の士気値が90パーセント以上が必要だ。今ので100になったはずだ」

「前回でも90を割ってません。私の前に出ないで下さい！」

それには答えず土畑は、内部ドアの周りを撃った。ニッコリ笑って、ドアに突進した。遅れたカリウスが慌ててついて行く。

ドアに体当たりして、廊下に転がり出た。上げた顔の先に、女性士官が拳銃を持って立っていた。遅れたカリウス軍曹が拳銃を持った手を押さえて、押し倒した。

「カリウス軍曹！殺すな！ブリッジまでのパスだ！」

カリウス軍曹は、首筋のナイフを危うく止めた。

「将官ですか？」

「アルテイシア ソム ダイクン。もしくは、セイラ マス。シャ

ー大佐の妹さんだ」

セイラは、厳しい顔を土畑に向けてにらんだ。

ー次話！

ー別第19話余話4

―別第19話余話4

―別第19話余話4

「アルテイシアと知って、ジオン兵が何故銃を向ける！」

これは名ゼリフの変形だ。ランバルルをひるませた言葉に、土畑もしびれた。

「任務です。アルテイシア様、失礼を承知で御協力を願います」

「断る！退きなさい少尉！」

「退けません。ブリッジまで我慢して頂きます…カリウス軍曹前進する」

カリウス軍曹は首をひねって後ろを見た。

「後続8名を待たないので？」

「アムロ レイが放すと思うか？」

クランプ曹長は外から、ブリッジの窓に向かっていている。エアロック内部から、跳弾するビュンビュンと云う音が漏れてくる。

「連中の何人かも、前回ブリッジまで行っている。後ろは任せよう」
「了解」

カリウス軍曹はセイラを盾にしながら、無重力の廊下を進み始めた。小刻みに進んでは止まる。小部屋の開いたドアに顔が見えて消えた。ブリッジと話す声がする。

「セイラが人質にとられた！手が出せない！アムロはどうした？」

「そこに居るのは、リュウ ホセイ曹長？」

しばらく沈黙が流れた。

「ツチハタ少尉殿か：この間はネズミのように這い登り、今回は女を盾にか？少しは正々堂々と戦ってみないか？」

「ホワイトベースクルーを相手に？コンスコン艦隊やガルマ ザビのように？今回はやめておく」

「ブリッジにはたどり着けない！あきらめろ！」

「リュウ曹長。それには、セイラさんを撃つしかない。この艦に仲間を撃てる人間は乗ってない。みんな生き残る為に頑張ってきたんだからな」

セイラが顔を上げた。カリウス軍曹は暴れる体を押さえる。

「リュウ！私ごと撃ちなさい！早く」

リュウ曹長は動かない。

「曹長。退くんだ。奥に誘い込めば、トラップの仕掛けようも有る。ブライト艦長と相談するべきだ」

「敵に言われる筋はない！ここは死んでも通さん」

「なるほど。じゃあそっちに前進する。チキンゲームだ。君が1連射しても、カリウス軍曹と私には当たらない。いくぞリュウ曹長」
小部屋の入り口は沈黙している。セイラを先頭に前進する。小部屋のそばまで来た。

「リュウ曹長。3カウントする。部屋を出て上に行くんだ。今手留弾の安全ピンを抜いた！」

クソツと云ううめき声と共に、リュウ ホセイ曹長がこちらを向いて出てきた。

「撃たないから急いでくれ。昼飯までには終わりたい」

リュウは後ずさりでさがって行った。

「このフロアは確保した。次は、どう上に上がるかだ。この先はブービートラップの見本市になってるぞ……」

土煙は、上に繋がった梯子の上に、閉じられたハッチを見上げた。

「少尉。セイラさんに、エレベーターで案内してもらおうと言つのは

「？」
「そうだな…面白い。おそらくは、関係ない場所にたどり着くだろうな。それで行くか…」

「ブライト艦長！」

オペレーターのおスカが上から叫んだ。

「どうした？おスカ」

「エレベーターの画像を出します！」

ブリッジのモニターにセイラと2人のジオン兵が映し出された。

「クソッ。ブリッジに来させるな！サブブリッジに行かせる！」

ミライがいぶかしげに言った。

「ブライト…これがセイラとツチハタ少尉であるとは限らないわ。

後ろ向きの上からの画像よ」

「…だとしたら？」

「梯子のハッチ周辺を無人にする為…と云う事も考えられなくて？」

「だがミライ。両方に配置するには、人数が足りない。そこがつけ目か！。どっちだ！」

オペレーターのメーカーの方が言った。

「それなら、エレベーターのドアを開けなければ、梯子の方をチェックできるのでは？」

「よし！それで行く。…リュウ聞こえるか？」

「ああブライト！」

「梯子のハッチを開けて、確認してくれ。エレベーターのセイラが本物かどうかチェックしたい」

「それはいいが、こっちが本物なら、突破されるぞ…」

「そのフロアは捨てても構わん！まだフロアは3つ残っている」

「わかったブライト…やってみる」

通信は途絶えて沈黙が流れた。しばらくして、リュウが叫んだ。

「やられた！こつちが本物だ！またフロアをひとつ獲られたぞ！
「なんて事だ…カイ ハヤト！サブブリッジでエレベーターの3人
を迎え撃て！」

「ハイハイ。こつちは準備万端整ってますよ。いつでもエレベータ
ーのドアを開けてもらって構わない」

「よし！オスカ！開ける！」

銃声がスピーカーから響いた。

「サブブリッジに敵3！近くの者は、応援に向かえ！」

「ブライト！アムロです。赤いゲルググだ！ガンダムに戻る！」

「なんだと！シャーか？こんな時に！」

「ブライト…これで下の敵は7名ね」

ブライトはミライを見た。

「リユウ聞こえるか？シャーが現れた。アムロが対応する。敵は7
名に増えた。ブリッジまで後退しろ！」

「カイとハヤトは？」

「スレッガーとサブブリッジで応戦している！手の開いた者もそつ
ちの応援に入った。そつちは、お前1人だ！」

「わかった。後退する」

ブライトは、ブリッジを見渡した。

「オスカ！そこはマークーだけでいい！銃を全員に配れ！死んでも
ブリッジを渡すな！」

ミライがアツと小さく叫んだ。ブリッジの窓の外に、ジオン兵でも
連邦でもない、ノーマルスーツの男が現れた。そばに、ジオン兵が
浮いている。前回ニセ爆弾を仕掛けた兵士だ。動かない。ノーマル
スーツの男は、バーニアを噴射させて去った。そして、その男はブ
リッジの操舵ユニットの前に、忽然と浮いて現れた。

「何者っ！」

男は薄笑いを浮かべた。

「初めまして、ホワイトベースの諸君。私は、ローラン ブリテイ
ス。大佐である」

―次話！

―別第20話余話5

―別第20話余話5最終話

―別第20話余話5最終話

「見た事のないマークですが、どちらの所属でしょうか？」

ブライト艦長は丁寧聞いた。

「コロニーサイド1744機動空挺団イージーカンパニー中隊ゲーマーズフロント部隊だ。」

「1744などと云うサイドは聞いた事が有りませんが？どこに有るサイドでしょうか？」

「ゲーム外のサイドだ。今このゲームをコントロールしているのは、ゲーマーズフロントのメインコンピューターでも、能登島でもない。この私だ」

「何が目的です？大佐」

「ツチハタ少尉に、自分のした事を認識し、謝罪を求める…それだけだ」

「ヒルドルフの一件ですか？ならば、それは筋違いでしょう」

「何がだ！」

「参戦していない国の人々を戦闘させるのは、違法でしょう。それによって生じた被害の謝罪は、求める根拠がない」

「ゲームキャラクターが…何様のつもりだ！」

ブリティスは拳銃をブライト艦長に向けた。ミライ ヤシマがその間に入った。

「何であるうと、あなたは間違ってます。戦争にもルールがあるんです。ちゃんと終結できるように！。戦争は恨みの晴らし合いでは

有りませんよ！」

ブリテイス大佐は、ミライの右肩の少し上を狙って、トリガーを引いた。後ろの壁に火花が散った。瞬間ブライトがミライを引き寄せた。倒れた。オペレーターシートからマークが飛び降りて、ブリテイス大佐に肘ひじを入れた。ふらつきながらもマークを背負ったまま倒れなかった。その足をフラウ ボウがさらに入った。両足を持たれたブリテイスは、払いのけようとしてもがく…マークは両手をつかんで使わせない。

その顔に拳銃が突きつけられた。

「ブリテイス大佐…惜しかったなあ。もうちょっとだったのに」
土畑は、2度と見なくなかった顔に言った。

「少尉。勝ったつもりか？。サツサとコンバットチェアの前に立つた方が良いんじゃないか？」

コンバットチェアはすぐ目の前だ。

「なんでこのシナリオにお前が居るんだ？シャーも出て来ないはずだ…」

「残念だな。クリアまでもうちょっとだったのに…惜しかったのは貴様の方だ」

突如モニターが消えて、筐体の中は真っ暗になった。

「ブリテイス大佐か？。またハッキングか？」
ブッ

モニターが点灯した。金属製の壁やパイプ、箱状の物が強烈な力でねじ曲げられたり潰されたりしている。作業灯がボンヤリと寒々とした空間を照らし出している。よくみると、曲がった銃や破壊された大砲も有る。

「これは、なんて云うシナリオだ？」

その光景の中に、ブリテイス大佐が歩いて現れた。

「シナリオなどではない。これは現実だ」

筐体の入口がゆっくりスライドした。

「なにっ……」

開いた扉から、モニターと繋がった光景が現れた。荒涼とした破壊の跡。

「1気圧に与圧してある。その目で見る！自分のした事を！」

土煙は立ち上がり、ゆっくりと筐体の入口から出た。振り返ると、筐体はこの寒々とした空間の中にポツンと置かれている。

「……ヒルドルフ号か？」

「どうだ。ここで500名が苦しみのうめき声を上げていた。想像がつくか？殺されるより残虐だ。自分じゃないと云うつもりか？。

ゲームキャラクターがやったか？。だが、お前が始めた戦闘だ。お前に責任が有る！」

土煙は、床に血痕が有るのに気付いた。

「俺を殺すか？。それで何が終わる。マキナ大尉が今度は、お前を殺し、戦争が再開して戦死者が出る。全体を見る！部隊規模や師団規模じゃなく、人々が暮らしている国と国の規模で。国の防衛の第1防御ラインは外交だ。軍隊が動くのは、その防御ラインが崩れたと言う事だ。それは国家が破綻する戦費を国民に負担させる事になる。もはや負け戦も同然だ。開戦してはいけない。負けない軍備を持った上でだ」

ブリテイス大佐は、聞いていないように言った。

「戦争を始めた連中は、クソツタレだ。それはわかっている。だが、無くて良い犠牲を出したなら、謝るべきだと俺は思う……」

ブリテイス大佐はゆっくり辺りを見回した。

「…違うか？」

土畑とブリテイスの視線が絡みあい、しばらくにらみ合った。

「そうだ。これは無くて良い犠牲だった。500名に謝罪する」

破壊された構造物の陰から、何かが湧き出して来た。杖を突いた者。

足が無い者…手が無い者。みるみるうちに、辺りに満ち満ちた。

「聞いたか！ツチハタ少尉も正義を戦った。正義を戦った者に刑罰を与える訳にはいかない！謝罪のみが要求される要件だ！」

傷ついた兵士達は沈黙して微動だにしなかった。

「有る方の手で！無い者は、目で。目の無い者は頭で！アキラ ツチハタ少尉に敬礼！」

ザツ…と音がして、敬礼が行われた。土畑は兵士では無いが、返礼した。

―余話エピソード―

「少尉。マキナ大尉が総勢100機で押し寄せて来ている。君を奪還に来たそうだ…我々は戦闘になっても構わないが、それは貴官の本意では無いだろう。貴官はその箱に戻り、我々は艦の外に出す。

我々からは撃たない。マキナ大尉との通信回線を繋ぐから、説得の機会を与えるが…どうする？」

「もちろん。戦闘にはさせない」

ブリテイス大佐は独り笑いをした。

「ゲームの中じゃあ、戦闘バカもいい人間なのに…不思議なヤツだ」

「理解するのは無理だ。諦めた方がいい」

土畑は筐体に戻った。扉が閉まるとすぐに、モニターがマキナ大尉と繋がった。

「無事か？少尉ケガは？」

「大尉。救出に来て頂き感謝します。ブリティス大佐は、ヒルドルフの戦闘について、話をしたかったです。これから艦の外に出してくれます。ブリティス大佐側からは一切撃ちません。そちら側からも同様をお願いします」

「無事はいいが…ブリティス大佐は信用できん」

「ブリティス大佐は信用しなくて結構。私を信用して下さい」

「なる程…見事に収めて見せる訳だな？」

「大尉のご協力が有れば…」

「協力しよう。ツチハタ少尉の要請は断れない」

「ありがとうございます大尉！」

マキナ大尉に筐体は渡され、ゲームズフロントの屋上に開いた穴から戻された。筐体の扉が開くと歩美が泣きながら飛び込んできた。歩美を抱きしめながら、土畑はマキナ大尉の伝言を中島に伝えた。

「この天井の穴だが。金属と違ってコンクリートは補修出来ないそうだ。自前で直してほしいそうだ」

中島は目をむいた。

「冗談じゃない！。やったのはブリティスだ！ヤツと話をさせる！」

「マキナ大尉？回線は繋がります？」

「ハッハッハッハ…失礼。繋げよう」

土畑は歩美を抱いたまま、中島と入れ替わった。

「ふざけんな…」

後ろで中島がモニターに向かって怒鳴っている。土畑は歩美とエレベーターに乗った。ゲームズフロント（ゲームの最前線）を後にして…。

ゲーマーズフロント別話完結

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8003n/>

ゲーマーズフロント

2010年12月27日13時25分発行